スポーツ振興基金
独立行政法人日本スポーツ振興センター

2017 FIPFA World Cup

日本代表チーム派遣事業報告書

- 平成 29 年度スポーツ振興基金助成事業

一般社団法人　日本電動車椅子サッカー協会

2017 FIPFA World Cup 日本代表チーム 事業報告書

目　次

1 ご挨拶　　一般社団法人日本電動車椅子サッカー協会 会長 吉野忠則
2 大会概要
1）実施概要 …… p.3
2）日程詳細 …… p.4
3）代表団構成 …… p.5
4）大会写真 …… p.7
5）大会結果 …… p.9
3 収支報告 …… p.10
4 選手より報告 …… p.11
＃ 1 竹田 敦史 …… p.11
＃ 6 内橋 翠 …… p.13
＃ 7 三上 勇輝 …… p.15
＃ 8 吉沢 祐輔 …… p.18
＃ 9 東 武範 …… p.25
＃１０ 北沢 洋平 …… p.27
＃１１ 塩入 新也 …… p.29
＃１９ 内海 恭平 …… p.30
5 スタッフより報告 …… p.31
日本代表監督（ヘッドコーチ） 浅岡 俊彰 …… p.31
アシスタントコーチ 三崎 賢治 …… p.32
アシスタントコーチ 眞島 哲也 …… p.33
チームドクター 夛田羅 勝義 …… p.35
チームドクター 鈴木 聖一 …… p.37
帯同看護師 阿部 麻里 …… p.38
メディカルスタッフ 上野 寿子 …… p.40
ホペイロ（キットマン）近末 勝司 …… p.43
チームマネージャー 筒井 彩樹 …… p.45
総務 川畑 ちづる …… p.48
分析担当 天岡 寛／小林 雅夫 …… p.50
研究協力 吉備国際大学 天岡 寛 …… p.53
6 大会参加総括 …… p.55
日本代表選手団 副団長 冨田 昭 …… p.55
7 助成・協賛社・寄付者・支援者・協力者一覧 …… p.60

第３回パワーチェアーフットボールワールドカップアメリカ大会を終えて
御支援、応援を賜りましたすべての方に感謝申し上げます。

一般社団法人日本電動車椅子サッカー協会
会長　吉野 忠則

第３回パワーチェアーフットボールワールドカップ「2017 FIPFA World Cup」アメリカ大会の選手派遣におきまして、多くの皆様から多大なる御支援ならびにご声援を賜りました。まずは、このワールドカップ出場の報告を前に皆様に心より感謝と御礼を申し上げます。多くの御支援を賜りまして誠に有難う御座いました。

この度のワールドカップへの日本代表チーム派遣は苦難の連続でした。資金難や重度障がい者が多い選手達の長時間にわたる渡航を考えたとき、日本代表チームの派遣が危ぶまれてもおりましたが、資金面では多くの皆様によるご支援やクラウドファンディングによるご支援を賜りました。また、医療関係者のお力添えを頂きましたおかげでようやく日本代表チームを派遣する事ができました。

大変ご心配をお掛けしました事、改めてお詫び申し上げます。

皆様の多大なるご支援は、アメリカの地で戦う選手の大きな勇気にもなりました。
そして、寄せられた多くのご支援は私たちの今後の活動を発展させていく事においても大きな力になった事は言うまでもありません。

電動車椅子サッカー日本代表はワールドカップに３回連続参加となりました、大会に参加するには電動車椅子サッカーに係わった多くの先輩方、日本各地において現在も活動に尽力しているスタッフや指導者や審判員の存在があり、たくさんの仲間がいて、それぞれの想いがあります。加え選手達のご家族やご友人関係者とさらに多くの皆様の存在や想いが重なり合い今回の結果に繋がっていることと思います。

世界５位と言う結果はそのすべての成果でもあります。

代表に選ばれた選手たちは、トップアスリートの誇りと高いモチベーションを持って日ごろの練習の成果を存分に発揮し、仲間を信じ、晴れの舞台で、観る人の記憶に残る最高のプレーをしてくれました。今大会に参加したどの国よりも一致団結して戦い抜き、日本代表と言う誇りを胸に、世界５位の成果を手にしたのは間違いありません、本当にありがとうございました。

国内合宿地として多くの面で協力をして頂きました株式会社ニチイ学館「神戸ポートアイランドセンター」の皆様にも大変お世話になりました。

上部団体でもある公益財団法人日本サッカー協会（JFA）、一般社団法人日本障がい者サッカー連盟（JIFF）におかれては、一般社団法人日本電動車椅子サッカー協会（JPFA）の現状を伝えていただき広くメディアにも紹介いただきました、代表のユニフォームはアディダスジャパン株式会社から提供もいただきました。

アメリカへ出発する際には壮行会も行っていただき大変お世話になりました。

１．ご挨拶

また、ワールドカップ出場に当たり、多くの物品提供から資金面のご支援まで、積極的に様々な援助を賜りました各企業の皆様、ご尽力を賜りましたすべての皆様に深く感謝を申し上げます。本来、皆様一人ひとりにお会いしお礼を申し上げなければいけませんが、ここに感謝の気持ちと御礼を申し上げます。

本当にありがとうございました。すべてのことが結果につながりました。

最後に、独立行政法人日本スポーツ振興センター様のスポーツ振興基金助成事業の多大なる助成金が無ければアメリカ行きの夢をかなえることは出来ませんでした。

本当にありがとうございました。

選手たちの障がいは重いです、でも「サッカーは選手たちの夢でもあります。」

どうか今後とも、電動車椅子サッカー発展のためにお力添えを賜りますよう宜しくお願い申し上げ、ご報告のご挨拶とさせていただきます。

１）実施概要

2017 FIPFA World Cup 大会概要

１．大会名称
2017 FIPFA World Cup（第 3 回 FIPFA ワールドカップ）

２．主催者
国際電動車椅子サッカー連盟（Federation Internationale de Powerchair Football Association）

３．組織委員会
アメリカ合衆国電動車椅子サッカー協会（United States Power Soccer Association）

４．大会日程
2017 年 7 月 3 日（月）～ 2017 年 7 月 10 日（月）

５．開催都市
アメリカ合衆国フロリダ州　キシミー

６．大会会場
試合会場　Osceola Heritage Park （1875 Silver Spur Lane Kissimmee, FL 34744,USA）
宿　　泊　Gaylord Palms Resort & Convention Center（6000 W Osceola Pkwy, Kissimmee, FL 34746,USA）

７．出場国
グループ A　アメリカ・デンマーク・日本・アルゼンチン・ウルグアイ
グループ B　イングランド・アイルランド・フランス・カナダ・オーストラリア　全 10 カ国

８．大会形式
出場国 10 か国を事前抽選により 5 チームに分けた 2 つのグループステージ実施後、
上位４チームによる「ノックアウトステージ」により優勝を争う

９．参考 URL
2017 FIPFA World Cup 公式ホームページ　http://fipfaworldcup.org/
FIPFA 公式ホームページ　http://fipfa.org/
2017 FIPFA ワールドカップ　大会中継動画（アーカイブ）
https://livestream.com/accounts/5795872/events/6965058

１０．広報・掲載メディア（日本代表関連）
公益財団法人日本サッカー協会
毎日新聞社
タウンニュース神奈川版

２）日程詳細

2017 FIPFA World Cup 日本代表　スケジュール

日付	スケジュール	
6月30日(金)	11:10	【成田空港】発　便名　JAL12
	9:05	【ダラス・フォートワース空港】着　　ホテル到着後フリー
7月1日(土)	12:55	【ダラス・フォートワース空港】発　第1G　便名AA2433
	16:39	【オーランド国際空港】着
	14:26	【ダラス・フォートワース空港】発　第2G 便名AA1212
	18:08	【オーランド国際空港】着
7月2日(日)	15:00-16:00	親善試合（対イングランド）
7月3日(月)	12:30-14:00	オプショナルトレーニング
7月4日(火)	9:30-11:00	公式トレーニング
	11:00-13:00	クラス分け
	21:30-22:30	FIPFA アンチドーピングセミナー
7月5日(水)	9:30-11:00	オプショナルトレーニング　親善試合（対アイルランド）
	14:00-15:30	オプショナルトレーニング　親善試合（対オーストラリア）
	16:30-17:30	開会式リハーサル
	17:30	オープニングディナー
	19:00	開会式
7月6日(木)	9:30	**グループステージPOOL-A第1戦vs. アルゼンチン**
	14:00	**グループステージPOOL-A第2戦vs. デンマーク**
	17:00	**グループステージPOOL-A第3戦vs. アメリカ**
7月7日(金)	11:00-12:30	オプショナルトレーニング
	15:30	**グループステージPOOL-A第4戦vs. ウルグアイ**
7月8日(土)	9:30-11:30	FIPFA総会
	13:30	準々決勝第1戦 アメリカ vs.アイルランド/イングランド vs.ウルグアイ
	15:00	準々決勝第2戦 フランス vs.アルゼンチン/**日本 vs.オーストラリア**
	18:00	順位決定予備戦　アイルランド vs.ウルグアイ /**アルゼンチン vs.日本**
	19:30	準決勝第1戦　アメリカ vs.イングランド
	21:00	準決勝第2戦　フランス vs.オーストラリア
7月9日(日)	9:00	9位決定戦 デンマーク vs.カナダ
	10:30	7位決定戦 ウルグアイ vs.アルゼンチン
	12:00	**5位決定戦 アイルランド vs.日本**
	13:30	3位決定戦 イングランド vs.オーストラリア
	15:00	決勝　アメリカ vs.フランス
	20:00	表彰式・クロージングディナー
7月10日(月)	11:40	【オーランド国際空港】発　第1G　便名AA2466
	13:26	【ダラス・フォートワース空港】着
	13:35	【オーランド国際空港】発　第2G 便名AA2555
	15:23	【ダラス・フォートワース空港】着　　ホテル到着後フリー
7月11日(火)	12:00	【ダラス・フォートワース空港】発　便名　JAL11
	15:15	**翌12日（水）**【成田空港】着　到着後解団式を経て解散

3）代表団構成

2017 FIPFA World Cup 日本代表チーム

●日本代表選手（8 名）

背番号	クラス	氏名	よみがな	所属チーム / 所属
1	PF1	竹田 敦史	たけだ あつし	Yokohama Crackers 有限会社パーソナルアシスタント町田
6	PF1	内橋 翠	うちはし みどり	レインボー・ソルジャー
7	PF2	三上 勇輝	みかみ ゆうき	Yokohama Crackers 日本メドトロニック株式会社
8	PF1	吉沢 祐輔	よしざわ ゆうすけ	レインボー・ソルジャー PwC あらた有限責任監査法人
9	PF1	東 武範	ひがし たけのり	Nanchester United 鹿児島
10	PF1	北沢 洋平	きたざわ ようへい	レインボー・ソルジャー PwC あらた有限責任監査法人
⑪	PF1	塩入 新也	しおいり しんや	Nanchester United 鹿児島 ジャパンライフ株式会社
19	PF2	内海 恭平	うつみ きょうへい	Red Eagles 兵庫 広島赤十字・原爆病院

＊〇キャプテン □副キャプテン

●日本代表強化スタッフ（8 名）

役割	氏名	よみがな	所属 / 派遣元
監督（ﾍｯﾄﾞｺｰﾁ）	浅岡 俊彰	あさおか としあき	JPFA (独)国立病院機構 長良医療センター
アシスタントコーチ	三崎 賢治	みさき けんじ	JPFA 技術委員会 社会医療法人財団 慈泉会 相澤病院
アシスタントコーチ	眞島 哲也	ましま てつや	神奈川県電動車椅子サッカー協会 株式会社スタートライン
キットマン／ホペイロ	近末 勝司	ちかすえ かつし	広島県電動車椅子サッカー協会 広島市立病院機構 広島市立自立訓練施設
チームドクター	夛田羅 勝義	たたら かつのり	JPFA 医学・学術委員会 徳島文理大学
チームドクター	鈴木 聖一	すずき せいいいち	茨城県立中央病院
メディカルスタッフ	上野 寿子	うえの ひさこ	長野県電動車椅子サッカー協会 社会福祉法人 信濃医療福祉センター
メディカルスタッフ	阿部（土井）麻里	あべ（どい）まり	東京大学大学院医学系研究科

2．大会概要

●帯同スタッフ（12 名）

役割	氏名	よみがな	所属 / 派遣元
団長	吉野 忠則	よしの ただのり	JPFA ふぁみーゆツダコマ株式会社
副団長	冨田 昭	とみた あきら	JPFA/社会福祉法人広島県福祉事業団 広島県立障害者リハビリテーションセンター
チームマネージャー	筒井 彩樹	つつい さいき	JPFA
総務	川畑 ちづる	かわばた ちづる	神奈川県電動車椅子サッカー協会/社会福祉法人青い鳥横浜市東部地域療育センター
分析担当	天岡 寛	あまおか ひろし	学校法人順正学園 吉備国際大学
分析担当	小林 雅夫	こばやし まさお	JPFA 技術委員会
アテンドスタッフ	宮崎 雅司	みやざき まさし	医療法人術徳会 霧島整形外科
アテンドスタッフ	吉沢 誠	よしざわ まこと	-
アテンドスタッフ	北沢 浩之	きたざわ ひろゆき	-
アテンドスタッフ	曽根田 信一	そねだ しんいち	-
アテンドスタッフ	東 百代子	ひがし もよこ	-
アテンドスタッフ	内橋 舞子	うちはし まいこ	-

以上 選手団 24 名 バックサポートオフィス 4 名 計 28 名

■ FIPFA 国際電動車椅子サッカー連盟 国際審判員

審判員	齋藤 純一	さいとう じゅんいち	JPFA

4）大会写真　- 遠征の様子

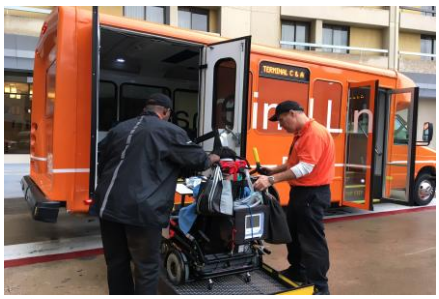
車椅子の解体作業

取扱い方法を記載

機内用車椅子

Dr.による呼吸器管理

機内での様子


ダラス空港にて

大会輸送バス

選手 8 名とスタッフ全員が一度に乗車可能

クラス分け（身体的評価）

クラス分け（実技）

食事会場

本会場展示ブース

イングランドとの親善試合

アイルランドとの親善試合

開会式

開会式　日本代表チーム入場

試合終了後

２．大会概要

コンディショニングの様子　創傷予防

最終アイルランド戦

試合記録

○グループステージ POOL-A 第１戦
日本　3 － 2　アルゼンチン
得点　7 分　塩入
　　17 分　塩入
　　25 分　三上

○グループステージ POOL-A 第２戦
デンマーク　2 － **2　日本**
得点　9 分　内橋
　　40 分　東

●グループステージ POOL-A 第３戦
アメリカ　9 － **0　日本**

○グループステージ POOL-A 第４戦
日本　2 － 1　ウルグアイ
得点　5 分　塩入
　　12 分　竹田

●準々決勝
日本　1 － 2　オーストラリア
得点　11 分　三上

○順位決定予備戦
日本　1 － 1　アルゼンチン
（**PK　4** － 2）
得点　25 分　三上

○5 位決定戦
アイルランド　1 － **4　日本**
得点　20 分　内海
　　31 分　三上　35 分　東　38 分　塩入

5） 大会結果

【最終順位】

優勝 ： フランス
準優勝 ： アメリカ
3位 ： イングランド
4位 ： オーストラリア
5位 ： 日本
6位 ： アイルランド
7位 ： アルゼンチン
8位 ： ウルグアイ
9位 ： デンマーク
10位 ： カナダ

【試合結果】

決　　勝 ： フランス 4 － 2 アメリカ
準 決 勝 1 ： フランス 7 － 0 オーストラリア
準 決 勝 2 ： アメリカ 2 － 1 イングランド
3 位決定戦 ： イングランド 3 － 0 オーストラリア
5 位決定戦 ： 日本 4 － 1 アイルランド
7 位決定戦 ： アルゼンチン 3 － 2 ウルグアイ
9 位決定戦 ： カナダ 0 － 2 デンマーク
準々決勝 1 ： フランス 11 - 0 アルゼンチン
準々決勝 2 ： 日本 1 - 2 オーストラリア
準々決勝 3 ： イングランド 4 - 0 ウルグアイ
準々決勝 4 ： アメリカ 7 - 0 アイルランド
プレーオフ 1 ： ウルグアイ 0 - 2 アイルランド
プレーオフ 2 ： 日本 1 - 1 アルゼンチン（PK4-2）

グループ A　結果 ：　1 位 アメリカ **2 位 日本** 3 位 ウルグアイ 4 位 アルゼンチン 5 位 デンマーク

チーム	USA	JAPAN	URUGUAY	ARGENTINA	DENMARK	勝	負	分	試合数	得点	失点	得失点差	ポイント
アメリカ		○9-0	○6-0	○7-1	○8-0	4	0	0	4	30	1	+29	12
日本	●0-9		○2-1	○3-2	△2-2	2	1	1	4	7	14	-7	7
ウルグアイ	●0-6	●1-2		△2-2	○3-1	1	2	1	4	6	11	-5	4
アルゼンチン	●1-7	●2-3	△2-2		△1-1	0	2	2	4	6	13	-7	2
デンマーク	●0-8	△2-2	●1-3	△1-1		0	2	2	4	4	14	-10	2

グループ B　結果 ：　1 位 フランス 2 位 イングランド 3 位 オーストラリア 4 位 アイルランド 5 位 カナダ

チーム	FRANCE	ENGLAND	AUSTRALIA	IRELAND	CANADA	勝	負	分	試合数	得点	失点	得失点差	ポイント
フランス		○2-1	○4-0	○9-0	○11-0	4	0	0	4	26	1	+25	12
イングランド	●1-2		○5-0	○3-0	○7-0	3	1	0	4	16	2	+14	9
オーストラリア	●0-4	●0-5		○2-0	○4-2	2	2	0	4	6	11	-5	6
アイルランド	●0-9	●0-3	●0-2		○4-0	1	3	0	4	4	14	-10	3
カナダ	●0-11	●0-7	●2-4	●0-4		0	4	0	4	2	26	-24	0

■表彰

MVP 最優秀選手賞 ：Abdullah Karim (オーストラリア)　　Fair Play Award フェアプレー賞：アイルランド代表
Golden Guard Player 得点王 ： Mohamed Ghelami（フランス） 15 得点

3．収支報告

一般社団法人　日本電動車椅子サッカー協会
2017年度 日本代表強化･育成事業　収支報告書

対象事業：2017 FIPFA World Cup日本代表最終合宿･2017 FIPFA World Cup日本代表ﾁｰﾑ派遣

科目		金額	摘要
収入	参加費(W杯ｴﾝﾄﾘｰ等)	4,333,707	大会個人エントリー費、個人保険料、個人負担ウェアインナー購入代
	参加費(研修その他)	474,228	2017 W杯最終合宿参加費用(自己負担分)
	繰入金	543,238	JPFA事業予算
	協賛金収入	9,212,767	寄付（Ready For支援･法人･個人ご寄付）
	基金助成金収入	3,000,000	ｽﾎﾟｰﾂ振興基金助成金
	預金利息	4	受取利子
収入合計		**17,563,944**	
支出	会場使用費料	157,323	合宿会場借料･W杯現地ﾊﾞｽ･ｺｰﾄ借料
	備品借用料	253,041	合宿備品借料･W杯wifi･医療機器借料
	通信運搬費	53,817	協会備品送付（W杯･合宿）
	印刷製本費	-	
	旅費	1,076,853	派遣審判旅費･合宿宿泊費（合宿）/ｽﾀｯﾌ･選手国内移動旅費（W杯）
	渡航費	8,873,200	航空券･空港税他　28名分
	滞在費	2,235,924	中継地宿泊28名分･現地前2日宿泊費24名分･選手団外4名宿泊費
	謝金	400,000	W杯医師･看護師派遣･翻訳謝金（W杯）
	備品購入費	6,874	ﾒﾃﾞｨｶﾙ備品（簡易ｴｱﾏｯﾄ）
	ｽﾎﾟｰﾂ用具費	107,956	代表ユニフォームインナー購入（W杯）
	雑役務費	144,558	旅行会社手配手数料（W杯）･振込手数料、海外送金手数料
	消耗品費	11,534	配送梱包材･ﾒﾃﾞｨｶﾙ備品･ｳｫｰﾀｰｼﾞｬｸﾞ等
	租税公課	-	
	飲食費(自己負担)	177,228	合宿食事代
	大会ｴﾝﾄﾘｰ費用	3,335,369	2017 FIPFA World Cupｴﾝﾄﾘｰ費用（選手団24名$30,000-）
	大会ﾃｸﾆｶﾙﾌｨｰ	384,039	2017 FIPFA World Cupｵﾌｨｼｬﾙ(FIPFA審判･ｸﾗｽ分け)派遣費分担金
	保険料	346,228	損害保険･傷害保険（代表合宿）/海外保険料（W杯）
支出合計		**17,563,944**	
収入 - 支出		-	

「2017　FIPFA ワールドカップについての所感」

＃１　竹田　敦史　選手

初めに、今回の 2017FIPFA ワールドカップ出場にあたり、多くの方々から温かいご支援・ご協力を賜りました。
あらためて、皆様方にお礼申し上げます。

2013 年にオーストラリア・シドニーで開催された第 1 回 APO カップ(アジア太平洋オセアニア選手権)に続き、アメリカ・フロリダ州のキシミーで開催された 2017FIPFA ワールドカップが、私にとって 2 度目の国際大会となりました。今大会でも想定外の出来事は多々ありましたが、そんな中日本では得られない様々な貴重な経験を得ることができました。
この報告書では、渡航による飛行機での移動・現地での生活や、ワールドカップ出場について主に感じたことを述べさせていただきます。

○渡航時の飛行機による移動及び現地での生活について感じたこと

・飛行機での移動
電動車椅子を貨物として航空会社に預ける際、決められたサイズ内に収めるため空港内で解体する必要があります。又、行き先の空港に到着した後は電動車椅子サッカーを組み立てることになります。今回は事前にシミュレーションをしたことで、当日どれくらいの時間を要するか、どのような物や工具が必要か分かり、当日の解体・組み立てが大変スムーズに行えたと思います。時間的には電動車椅子 1 台の解体・組み立てにそれぞれ 30 分ほど掛かりました。

・飛行機内での人工呼吸器使用
飛行機に搭乗中はパルスオキシメーターを付けていました。私は睡眠時に人工呼吸器を使用していますが、日中は普段使用していません。
しかし、飛行機内の気圧の変化によって苦しくなった場合にすぐ使用できるよう、航空会社了承の上、搭乗中は足下に人工呼吸器を置いていました。
実際、搭乗中に酸素飽和度の値が下がり幾分呼吸が苦しくなった時がありましたが、慌てることなく呼吸器を使用し問題なく搭乗することができました。

・滞在中のホテルでの生活
ホテルの部屋は広めでバリアフリーになっており、車椅子での滞在はそれほど困りませんでした。
しかし、ベッドの高さが日本のホテルのものより比較的高めのベッドであったため、車椅子からベッドへの移乗等が少し困難でした。
又、トイレや浴室の手すりの位置や設備等も普段使用しているものと異なるため、普段と違う環境による介助・生活をあらかじめ想定しておくことが必要だと思いました。

４．選手より報告

○ワールドカップに出場して感じたこと

10 カ国による参加となった今大会ですが、全体的にレベルが上がってきているというのが率直な感想です。

特に電動車椅子サッカーでは後進国であるアルゼンチンやウルグアイは若い選手を中心としたチームでしたが、とても勢いがあり予想以上に手強い相手でした。

日本代表は他国と比べると平均年齢が高いチームであり、今後の強化を考える上で若い選手の発掘や強化は重要な課題になると思います。

又、日本と違い他国は国際大会に場慣れしているという印象を強く感じました。

日頃から国際大会などに出場していることで、他国の情報が得られやすい・強豪国のレベルを計れるなどの利点もあるが、場数を踏んでいることで国際大会特有の場の雰囲気に呑まれず、アクシデントが起きても動じずに自分たちの力を発揮できるというのは、大会の上位を狙う上では非常に重要です。

特に、優勝国フランス・準優勝国アメリカはワールドカップ決勝という最高の舞台で最高レベルのプレーを繰り広げていましたが、これは両国の国際大会経験の豊富さを物語っていると感じました。

日本は地理的に困難な面もありますが、将来的には若い世代の代表による国際大会や他国との親善試合が行われる環境が整備されることで、悲願のワールドカップ優勝への道が切り拓かれていくのではないかと思います。

その場にいた者にしか感じられないことは必ずあります。

この報告書にて述べたこと以外にも、伝えなければならないことはたくさんあります。

長年電動車椅子サッカーに携わってきた者として、どんな形になるか分かりませんが、この経験を伝えていくことが日本電動車椅子サッカーへの恩返しになれば幸いです。

最後に、ワールドカップを共に戦った選手・スタッフ・アテンダント・ご家族、すべての皆さんに心からの感謝を申し上げたいと思います。

本当にありがとうございました。

以上、所感ではありますが報告とさせていただきます。

2017 FIPFA ワールドカップに参加して

＃6 内橋 翠 選手

日本代表の一員として初めての海外遠征を体験しました。日本→ダラスまでが約 11 時間、ダラス→フロリダまでが約 3 時間。その他移動時間を含めた丸々2 日の長距離移動でした。その中で個人的にですが感じたことを伝えていき今後に繋げていけたらと思います。

また、監督をはじめコーチ、スタッフ、ドクター、アテンダントの方々のサポートや皆様からのご支援、ご声援にはとても感謝しております。この場を借りてお礼申し上げます。

本当にありがとうございました。

1．合宿

・電動車椅子解体・梱包

→合宿で解体練習の場を設けていただけたのはすごく助かりました。ただその場で初めてだったので工具の準備が完璧では無く迷惑をかけてしまった。最終的な梱包した写真は見せていただいたがどの様にそこまでの過程にいったのか。軽く手順の説明が必要だと感じました。今後は簡単な参考ビデオ動画などがあると事前にシミュレーションができると思います。

2．渡航

・搭乗用車椅子(手動車椅子)

→普段使っている車椅子とは勝手が違う為、対策用具は持っていたが長時間の使用は側彎もあるためきつかった。解体したあと搭乗まで距離・時間がどのくらいあるのか通常型かフルリクライニング型かアンケートとった時に知れるといい。

・機内

→機内用車椅子は通路に合わせた車椅子設計になっているので、座幅が狭い、ひじ掛けがない為ベルトだけの固定。更に座席が一番後ろで距離が長く辛かった。御手洗いの場所が近いからかと思っていたら、広め御手洗いは後ろでは無く前の席と言われた。何も指定がないのであればなるべく前方の席にしてもらえると身体の負担が軽減される。

・移動日

→２日間で解体→組み立ての回数が増えアテンドの疲労が心配だった。選手にアンケートをとり１日で行ける人は行きたかった。

３．大会

・控室

→時間がある時休息出来る様にエアマットを準備していただけたのがすごく助かった。同時にコンディショニングも行っていただけたのでありがたかったです。

・移動(バス)

→選手の身体に負担を少なくなるようきちんとした車椅子の固定、頭部などのクッションの準備、道路段差の事前の知らせが約 30 分かかる移動でも疲労がたまらずに済み助かりました。

2017 FIPFA World Cup 報告書

＃７　三上 勇輝　選手

1　はじめに

２０１７FIPFA World Cup の日本代表として２０１３年 APO Cup Team NIPPON に引き続き日の丸を背負わせていただきました。海外チームとの戦いの厳しさや大会運営などを含めた文化の違いを経験していた今回は、大会へ取り組む事においてストレスはそれほど感じず、日本との違いを楽しみリスペクトをしていました。

皆さまご存知の通り１０カ国中５位という不甲斐ない結果となりました。一選手とし、力不足であり準備不足だったことは猛省しています。これまで支援してくださった皆さま、日本から応援してくださった皆さま、選考に落選してしまった選手に対し優勝カップを持ち帰れなかったことに責任を感じています。

2　大会前

2.1 良かった点

２０１７年３月日本代表選手発表後、週一回の選手ミーティングを実施し、意見交換（問題点や改善方法、やりたいこと）や海外チームの過去映像を分析した。

浅岡監督から６パターンフォーメーションの説明があり、やることが明確し試合に臨む上で迷いなく取り組むことができた。

「安全に行って安全に帰える」と１つの目標のため、夛田羅先生を中心としスタッフ、選手がしっかり準備ができた。

クラウドファンディングなど新たな手法でご支援をいただけた。

2.2 悪かった点

日本代表選手が決定し１回の合宿しか実施できたなかった。

国際大会（海外チームとの試合）の経験を積めなかった。

2.3 改善点

チームを作る上で、選考という選手としては競争がある以上、選ばれたいという心理が働いてしまうため、１年などある程度期間を取り日本代表選手を決定し、そこからの入れ替え制にした方が選手達のチームワークや心理的な安定感に違いがあり改善をして欲しいと感じました。

運営的な面でやはり資金不足は感じることが多々あった、自己負担や合宿開催頻度、遠征費用など目標を設定し長期的に資金を支援いただけるように日本協会は考える必要があると感じた。

3　大会中

４．選手より報告

3.1 良かった点

大会直前だが、３カ国との練習試合を組めたことは、筒井理事、冨田 GM の尽力の賜物だと感謝しています。そのおかげでスタッフ、選手はしっかり軌道修正ができた。

私は練習試合でチャージングをかなり取られ日本でやってきた落としや相手横に対してボールを介して前で押すなどを改善しなければいけないことに気づき本大会では徐々にではあるが順応できた。

コーチ陣、アナリストのおかげで試合に臨む前に相手チームの長所短所を明確に説明があり、攻めるポイントを決めてしっかりと選手も順応し対応できた。

２週間という長期遠征で体に負担があるなかでスタッフ、アテンダントの生活サポートや体調管理、パフォーマンスを支えるマッサージなど献身的なサポートで体調不良や大きな怪我はなく試合に集中できた。

前記の通り今回アナリストという他国や自国の分析を担当するチームが同行できたことは、今後の大きな一歩となる可能性を感じました。ヘッドコーチやアシスタントコーチでは、時間や観客席で試合を観られるなど制約が掛かる部分をフォローでき好条件での分析をチームに落とせることは勝利を取りに行くためには必要と感じた。

3.2 悪かった点

本大会が始まる直前で、一人の選手とスタッフ陣での主張の違いがあり揉めてしまったことがあり不安な部分もあった。チーム力が技術的にも体力的にも劣っている場合の戦い方について考えておく必要があると感じた。

3.3 改善点

日本独特の受け身サッカーは通用しない、ローリスクローリターンの考えた方を脱却し、割り切り基準を引き上げる必要性を感じた。重度障害の選手が多い日本は、フィジカル面でかなり他国に劣っている視野、体力、切り返しなどそのことをもう一度再認し日本サッカーを考え作り上げる必要がある。

PF２クラスの選手育成方針を変えることがマストの課題になると感じた。今は PF２の選手はフィジカルの部分が多くピックアップされていて技術は２の次３の次という、文化が根底であるがそうではなく技術力、思考能力、分析能力、メンタルを PF１レベルに引き上げるという目標が日本全体で必要だと思う。

車椅子性能の違いを感じる部分が本大会では多々あった、これは日本の立地、環境の面ではしょうがない部分もある。国土が狭い日本はナローが主流となり、スタンダードを乗っている選手は極わずかで、日本代表選手８名中３名（１名ショート）のみだった。このアドバンテージは大きい、技術力や戦術力があってもこのアドバンテージは埋まらないことがわかった。マシン性能の向上をやはり日本も取り組まなくてはならない。そのためには専門の技術者を確保することや企業とのタイアップなどを考えて世界に負けないなおかつ日本でも使える車椅子を作る必要を感じた。自動車産業は今後電気自動車にシフトをしていくと予想されるが、この電動車椅子サッカーはバッテリーやモーター、車重バランスなど全てが高い水準を求められるスポーツで製品開発には合致していると考える。そういった視点から企業との共同開発などをできればマシン性能の向上ができるではと考える。

４　まとめ

私は World Cup 初出場を経験させていただき、また 2 回目の日の丸を背負うことができ皆さまに感謝しております。今回悔しくも５位という結果となり結果で感謝を伝えることはできませんでした。様々な課題や問題点が浮き彫りになった大会ですが、日本代表団、アテンダント含め約５０名が一丸となり戦ったことは紛れもない事実です。誰も諦めず誰も手を抜かずに戦ったと思っております。ですがご声援、ご支援、ご協力してくださった皆さまにはなんと釈明をしても足りなく自己努力が足りなくリサーチが甘く、向上心が足りなかったと悔やみこれから私はさらに自分を向上させ日本が世界をリードできるよう、この経験を広く伝え根づかせ、改善ができるようにしていくことが今大会に参加した選手、スタッフの責務と考えます。

最後となりましたが、２０１７FIPFA World Cup を準備開催してくださった FIPFA の方々アメリカ実行委員会の方々、日本電動車椅子サッカー日本代表へご声援ご支援ご協力いただいた方々、企業の皆さま誠に感謝申し上げます。ありがとうございました。

浅岡監督率いる２０１７FIPFA World Cup 日本代表で一緒に戦うことができこのチームは最高だったと感じ取り組むことができました。この環境を作ってくれた、約４０名のスタッフ、アテンダント、選手に感謝です。

４．選手より報告

2017 FIPFA World Cup 報告書

＃８　吉沢　祐輔　選手

■サポーターの皆様へ　お礼

2017 FIPFA WORLD CUP 遠征が終了し、13 日に帰国いたしました。結果は、10 カ国中第 5 位という結果。非常に悔しいです。皆様からたくさんの応援をいただいたのに結果で恩返しができず大変申し訳ありません。結果がすべて、何一つ言い訳を書くつもりはありません。ですが皆様のご支援には本当に感謝しております。この場を借りてお礼申し上げます。ありがとうございました。

■スタッフ、アテンダント、同行者の皆様へ　お礼

吉沢家ではできるところは頑張り、できないところは遠慮なくお願いしちゃっていました。買い物、荷物運び、お風呂、マッサージ、抱え、トイレなどとにかく手伝っていただきました。皆さんのサポートがあって、選手吉沢はプレーに集中できました。本当にありがとうございました。

■関係者の報告書とＪＰＦＡ（技術委員会）の計画書はセットで作って欲しい。

報告書はあくまでも関係者個々の活動・反省・提言がまとまった反省資料にすぎません。これらを踏まえて次の４年間、8 年間をどうしていくか大方針を描くのはＪＰＦＡ（技術委員会）にお願いしたいです。

いままでは出ている反省をどう活かすのか明言されることもありませんでした。多くの方々からご支援をいただいているので、次に向けてのプランを作って皆さんに報告を公式に行ってほしいです。関係者の思いにしっかりとリアクションをしていただくことを条件にこの報告文を書かせていただきます。

■障害の軽い選手へ

僕より障害の軽い選手へ一言。障害の軽い重い関係なく、できることできないことあると思います。だから僕は軽いからと重い選手と比べたり、引け目を感じる必要はないと思いますし、遠慮しないでほしい。できるけど時間がかかることやできないことはお願いして欲しいです。障害の軽い重い関係なく公平であってほしい思いがあります。みんな好きで障害を持ったわけではありませんから。障害が軽くても大変なことがあると思いますし、そこは重度の選手も理解してほしいです。

【壮行会】

日本サッカー協会 JFA の関連団体である日本障害者サッカー連盟 JIFF が 7 団体の障害者サッカーの統一ユニフォームを発表しました。統一ユニフォームを使用しての国際大会出場は電動車椅子サッカーが初めてでした。日本サッカー協会 JFA、日本障害者サッカー連盟 JIFF が統一ユニフォーム発表会を開いてくれました。

【空港での電動車いすの解体梱包作業】

電動車いすは荷物として預けます。解体を行い作動不能にさせ、コンパクトに梱包する必要があります。

まとめて解体・梱包を行います。

ひじかけなども外します。

誰のものか、ブレーキの場所などを図示

まとめて預けます。

機内荷物預け行き

４．選手より報告

【空港内の移動】

空港の車椅子に乗り換えます。私たちのような障害があると自分の体に合っていない電動車いすに乗ることは難しいです。クッションやベルトなどを持ち込んで対応しました。

【機内でのシーティング】

私たちのような障害があると機内の席に座ることも簡単にはいきません。クッションやベルトなどを持ち込んだり、航空会社から道具を借りたりして、少しでも楽に座れるように対応しました。ただずっとこの姿勢でも辛いため、同行者に立ってもらって横になるなど工夫をしなければならないです。

【コンディショニング】

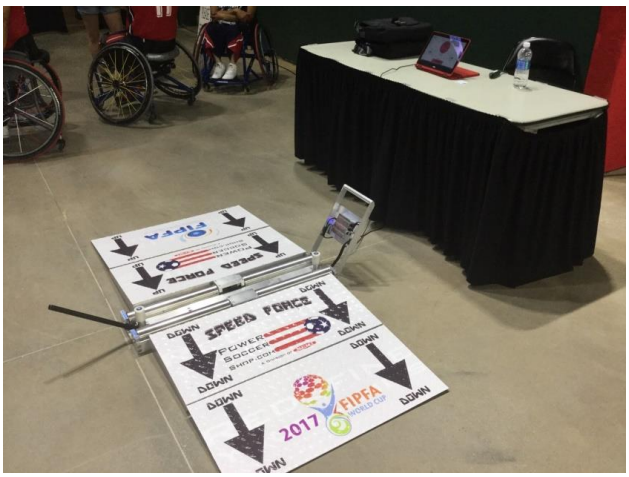
スタッフに PTOT 医師看護士など医療従事者が多く、コンディショニングに関してはかなり質の高いケアをしていただきました。褥瘡予防や圧がかかっている部位の除圧、マッサージ、アイシング、毎日のバイタルチェックなど多岐にわたります。

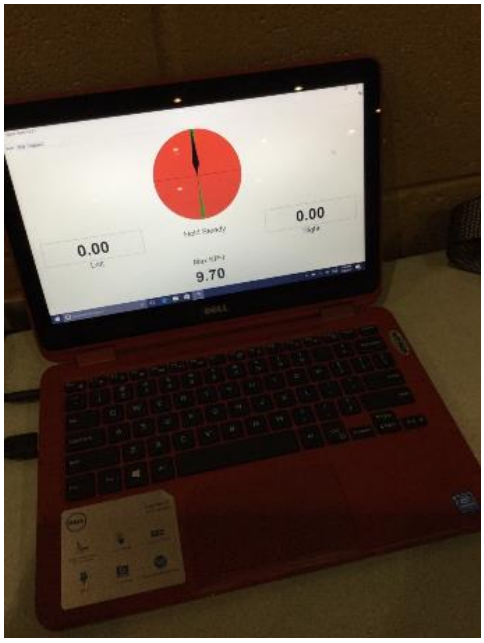
メディカル・コンディショニングスタッフが会場控え室にエアマットを持ち込み。
控室で横になり疲れを取りました。

【現地での介助生活】

スタッフにPT・OT・支援員など、介助に慣れている人も多く手伝ってもらいました。現地で、メディカルベッド、介護リフト、エアマット、シャワーキャリーもレンタルで利用していたのでお風呂などもスタッフの協力の下やっていました。

【スピード測定器】





４．選手より報告

【反省と課題】

１、通用したところ

細かい技術や連携、緻密なセットプレー・守備意識の高さ・ファールアピール・PK・メンタル・決勝トーナメントまでのコンディション調整とスタッフサポート・マシン修理面・レフリング対応　（アジャスト、経験）

２、通用しなかったところ

太字は少し通用できた部分

■技術面

・１対１、ドリブル　（押しのパワー、ドリブルスピード、反応の早さ、**押されたときの防御力、衝撃に耐えうる体、衝撃に耐える工夫**）

・パス&シュート　（ボールスピード、**ボールをつなぐ意識、ポジショニング**）

■戦術面

・戦術判断、戦術方向性　（ミーティング力、キーパー交代判断&準備、戦術判断とコミュニケーション、戦術浸透力）

■その他

・レフリングへの対応　（**マイボール判断、ファール認識の違い**）

・車椅子の性能　（設定、チューンアップ、情報）

３、今後の課題

■合宿回数、場所取りは計画的に回数多く

ニチイ学館様にはとてもお世話になっているし、会場も非常に使いやすく良いと思います。しかし、もっといろいろな場所でやってもいいのではないでしょうか。助成金以外にも参加者の自費やクラウドファンディングなど方法はいくらでもあります。そして年間ではなくもっと長期的なプランニングをしていただきたいです。

■海外選手との体格差

どのスポーツにおいても言われていることだと思いますが、真っ向勝負では日本の選手は分が悪いです。実際コンタクトプレーもジャッジは日本より甘いし、彼らは衝突に関して一切遠慮しません。ウルグアイ戦を見てもらえれば衝撃に耐えうる

体を作る必要が分かると思います。うまく力を抜いていなしたり相手の力を逆に利用するなどの対策が必要と思います。

■電動車椅子性能

初速のスピードや反応の速さやパワーなど電動車椅子サッカーに特化した操作性をどう追求していくか一つの課題でしょう。Conpensation,BoostDriveTime,Deseration,FastBrake など設定にも項目があるので試す価値はあります。ただし、Conpensation は 80 以上にすると壊れるので注意してください。私たち重度の障害を持つ選手たちにとって、電動車椅子性能があがることは大事なことです。性能を利用することで、できることが増え障害を感じづらくなるからです。性能が良ければよいほど選手生命は伸びると思います。性能が良い＝是か非かのについていろいろな意見があると思いますが、私たちは電動車椅子性能がこれからもっと進化してほしいと思っています。パラリンピックを目指していくのであれば競技用車いすの車種や設定を統一するなど同じ条件でできるようなレギュレーションを作らないといけないとは思いますし、将来的にはそうして欲しいです。

■育成

今回対戦した南米のアルゼンチン・ウルグアイはここ数年電動車椅子サッカーをやり始めたばかりなので、若い選手中心（12 歳から 20 歳くらい）でしたがレベルが高かったです。またレフリーに対しても臆することなくアピールしたり、仲間内でコミュニケーションを取るなど自己主張やコミュニケーション能力はすでに大人でした。日本の若い選手の多くはそこで一皮むけるのが一番大変で時間がかかります。彼らはそれを平然とこなしています。国民性もあると思いますが、海外のレベルアップの度合いと成長スピードが速いと感じました。

■国際化している競技の中で戦うという姿勢

ある車椅子バスケットボールの指導者の方がおっしゃっていたのが、競技が国際化しているという認識を持つことが重要だということです。この言葉の持つ意味を今回肌で実感できました。

世界の技術・戦術の思想、文化、レフリング・プレースタイル・組織運営等の流行や情報を知ることは大切だと感じました。また現地で起きた問題について交渉する力も必要です。そのための語学力、コミュニケーション力、積極性が必須です。島国の日本が世界と互角に戦っていくためには、世界を知らず国内だけで努力していても限界があることが見えてきました。世界で勝ちたければそこに飛び込んでいき、たくさん勉強や経験をして知っていくことが大事です。ものまねをすればと言っているのではなく、相手を知りましょうということです。例えば国内であれば仲間同士、ライバル同士、友人になり、アドバイスや相談をしあうと思います。同じことをそのうえで日本のオリジナリティを加えていくべきだと感じました。若手の育成　世代別代表、国際的な対外試合増加、世界のプレーやレフリングに触れる、海外移籍など関係者がどんどん世界を経験できる競技にもっとしていってほしいと思います。

■アテンダントについて

アテンダントに親が入ることや 1 選手に 1 人しかつけないことの限界を感じました。同時にアテンダントは若くて体力がある人を探す必要性や、介助を専門とするスタッフチームの必要性を感じました。前者は自分で探そうと思います。後者は介助を専門とするスタッフがチームで選手を介助できるようにできればすごく助かります。

理由は父がつぶれてしまったからです。父にとどめを刺したのは皮肉にも今回のワールドカップでした。夜の寝返り介助の練習で抱えをしたことがすべての始まりで、大会前にすでに足に痛みが出ていました。大会期間中は引き摺り歩きが始まり、多くのスタッフやアテンダントに至る所で助けていただきました。あれがなければ確実に父は倒れていたと思います。親子

共々感謝しています。それでも多くの部分は父が主で介助をし続けました。帰国後、急激な痛みに襲われ、今立つのも座るのもやっとの状態です。父は現在腰部脊柱管狭窄症とヘルニアで腰の状態が悪く、9 月に手術を予定しています。いまは介助も完全にできない状態です。父は文字通り燃え尽きてしまいました。

親をここまで酷使して潰してしまったことにとても後悔をしています。同時にやりたいことがあっても親なしでやっていく方法を見つけたいと思い、今回を機に両親には引退してもらうことにしました。両親にはずっと頑張ってサポートしてもらっていたので、今後はセカンドライフを楽しく過ごしてもらいたいです。

■リアガードについて

FIPFA にリアの長さについての規定を設けてと意見を述べることを希望します。理由は競技としてリアの長さの規定がないことやワールドカップでリアをつけている選手がいたからです。このことはリアの是非は置いておいて、競技規則に抜け道があることを意味しています。競技を発展させたいのなら対外的に見て抜け道があるものは正さなければなりません。今回はリアガードについて想定やチーム内で規制をするのはあくまでも想定の中でのことであり、蓋を開けたらやっている選手がいて、しかも結果的には許されていました。彼らがオッケーで、僕らは NG というのは納得することは難しいです。ライバルがつけている、それが許されている以上、日本でもつける選手は増えると思います。想定や性善説を唱えるのも大事ですが、国として今後提言をしていただかなければ想定や性善説を唱える意味を見出せないと思います。

４、終わりに

ワールドカップに全く関係ない話題かもしれませんが、日本代表に 10 年かかわってきて 1 番強く感じたことを述べさせていただき、この 10 年を締めさせていただきます。

FIPFA が定める、どうしてベンチ入りスタッフが 4 名までなのか、どうして代表団は 24 名までなのか、いくつか思うところはあります。スポーツだから、パラリンピックがそうだから、他の競技もそうだから、などなど思い当たる言葉がいくつかあります。そういう言葉を聞くたびに思うのはいやいや同じスポーツでも障害の状態はみんなそれぞれ全然違うでしょということです。それぞれの障害に適したものがあってよいのではないでしょうか。スポーツだから、パラリンピックがそうだから、他の競技もそうだからと言う発言からは 1 つ前からある決まりにどういう状況の人も合わせないといけないという思想に聞こえて仕方がありません。確かにある面では必要ですが、全部それって無理がありませんか。むしろ、こういう障害が多い競技にはここは厳しすぎないか、ここは設ける必要はないんじゃないかという議論をするべきじゃないでしょうか。障害者がスポーツにあわせるのではなく、スポーツがそれぞれの障害に合わせて適切な規則を設けるべきだと思うのです。そうでなければスポーツのダイバーシティ(多様性を認める社会)は実現しないと思います。他の競技と比較する前に電動車椅子サッカーの場合は何が適切なのか、まずそこから考えていくべきだと思います。

2017ＦIPFA ワールドカップに参加して

＃9　東 武範　選手

今回 FIPFA ワールドカップに参加して自分なりに感じたことを書いていきたいと思う。
まず、今回の結果 5 位というのは正直かなり悔しく、ただそれと同時に世界の壁の高さに驚き敵わなかったとハッキリ言える。どこに差があるかはハッキリとわかっている。

1.マシンの差

アメリカ、フランス、イングランドなどは特にマシンの動きが日本では全く体験したことのない動きをしていた。押しの強さ、初速の速さ、一対一ではことごとく日本の選手たちは負けていた。自分においては一対一で粘ることさえできなかった。マシンの設定や、改良などにあまり力を入れていない日本はかなり世界のスタンダードからは外れていた。

2．ワールドカップでの完成度の違い

僕たち日本はワールドカップに行くまでに選手選考に時間がかかり、なかなか代表メンバーでの合宿や練習ができなかった。他のチームは戦術的にも連携が取れていたし、チームのスタイルが確立されていた。ただこれは批判では決してなく、重度な障害を持つ日本チームは安全に行って帰るためにはしっかりとコンディション面を重要視しなくてはならない側面もあった。ただ明らかに世界とは完成度に差があり、ワールドカップまでの期間にどのようにチーム力を上げられるかが課題になると思う。

3．障害度の違い

ここの部分はすごく書き方が難しいが、日本は障害度の重い PF1 の選手が多く、海外の PF2 主体のチームとやり合うにはかなり厳しい状況になってしまう。僕自身のようにフィジカルが弱く、呼吸器を付けた選手が一対一で対応していくにはかなりの負担になる。また PF1 でも障害度の軽い選手が海外は多く、正直 PF1 と 2 の見分けもつかないほどだった。ただこれは決して重度な障害を持つ選手に諦めろと言いたいわけではなく、フィジカル面でも耐えられるようにしなければいけないし、自分の役割を見つけることも必要。例えば僕はドリブルはほとんど通用しなかったけど、キックだったり、相手を押さえて味方の動きをサポートしたりしてどうにか自分のポジションを見つけた。だからこそ普段のトレーニングから海外の選手たちと対戦するイメージを持ち、対応する方法を見つけるべきだと思う。

今回参加し、世界との大きな差を痛感した。選手レベルだけでどうにかなることではなく。日本として世界のレベルにアジャストしていかないととても追いつけない。10km の試合を増やすこと、新たな世代の選手育成、マシンの強化、審判団のジャッジを国際的にアジャストすること。多方面からのアプローチが必要になると思う。4 年後、世界の基準は更に上がってくる。だからこそ今の段階から 4 年後を見据えた取り組みをしていくべきだと思う。

４．選手より報告

次にコンディション面や渡航についてワールドカップに参加して感じたことを書いていきたいと思う。

1.呼吸器を使用している選手、呼吸器が必要と思われる選手はバッテリーや予備機、を準備しておく。今回かなりの長時間移動だったため呼吸器のバッテリーはかなり消費してしまった。飛行機に乗る前と降りた後も解体や手続きがあり、フライト時間以上に時間がかかることを想定すべきだと思う。

2．ホテルなど普段と違う環境でのコンディション管理が大切になる。今回でいうと僕の泊まった部屋ではバスタブがなく、別な選手の部屋を借りなければならなかったり、ベッドが固くて体が痛くなることもあった。どうにか持参したマットを使い対応できたものも、マットを持参していなかったらと思うと怖くなった。また北沢選手は普段使っている電動車椅子を、吉沢選手は手動車椅子を持って行っていたがすごく良い判断だったと思う。僕ももっと考えるべきだった。やはり、いかに普段通りの生活を海外でできるかがコンディションを維持するためには必要だと思う。環境のせいにしても仕方ないし、劣悪な環境でも対応できる準備はしておくべきだと思う。

3．英会話ができる能力が必要。今回僕は英語を全く勉強せずに現地に行ってしまったが、少しは話せないとかなり大変になる。空港やホテルなどでのコミュニケーションや、各国の選手に話しかけられてもなんにもコミュニケーションがとれない。正直もっと話をしてお互いの健闘を讃えたかったし、サッカーの話をしてみたかった。せっかく機会を無駄にしないためにも英会話は必要だと思う。

いろいろと書いてきましたが、今回 W 杯に行って貴重な経験ができたことは僕にとって最高の財産となりました。

この経験ができたのはスタッフやアテンダントの皆さん、選手の皆さん、サポートしてくださった方々、日本で応援してくださった皆さんたくさんの支えのおかげです。本当にありがとうございました。

この経験をたくさんの選手してほしいですし、次の W 杯を目指す選手の皆さんに僕が経験したことを還元していきたいと思います。

2017 FIPFA ワールドカップに参加して

＃10 北沢洋平 選手

まず初めに、私達電動車椅子サッカー日本代表を応援・ご支援していただきました皆様へ
この場を借りまして、御礼申し上げます。誠にありがとうございました。

結果はご存知の通り、10 カ国中第 5 位という結果でした。非常に悔しいです。皆様からたくさんの応援・ご支援をいただいたのに結果で恩返しができず大変申し訳ありません。反省や課題はありましたが、本大会中はそのことを誰も言い訳せずに今できることの最大を精一杯やりました。それでも届かないのがワールドカップだなと感じましたし、今後も競技全体として個人としてもさらにレベルアップして少しでも世界に追いつけるように頑張っていきます。

今回の 2017FIPFA ワールドカップの経験を伝えること、そして今まで日本代表で活動する中で思ったことがありますので、順を追ってお話して行きたいと思います。

●選考・合宿について

日本代表選手選考について、日本代表監督・コーチが選手選考を行う際に大会での試合を視察すると思うのですが、監督・コーチがどの大会を見て選考しているのか、どういう基準で選考されているのかがあまり説明されていないので日本代表を目指そうとしている選手のモチベーションが上がらないと思います。

選考基準が明確ですと日本代表監督・コーチが見に来ているから頑張ろう、いろんなことにチャレンジしてアピールしようとモチベーションが上がると思います。大会を頑張っていない選手はいませんが、そうすることでさらにモチベーションが上がって良いのではないかと思いました。

そして次に日本代表合宿について、これは費用がかかることなのであまり強くは言えませんが、今回の 2017FIPFA ワールドカップ日本代表選手 8 名が決定してから 1 度しか合宿がありませんでした。クラブチームとは勝手が違いますので、1 度の合宿だけではコミュニケーションを密に取れませんし、連携等も合わせられないと思います。いろいろな制限があると思いますが、合宿はとても重要だと思いますので数を増やしていただきたいです。

●電動車椅子梱包・空港内移動

今回私は、競技者用と生活用の電動車椅子で行きました。 2 台の電動車椅子を梱包したので大変でしたが、梱包時間は 4、50 分ぐらいで、梱包回数は、行き帰りで 4 回×2 でした。

競技者用の電動車椅子ですと競技で使用するのでサスペンションがなくクッション性もないので街中を乗るには乗りづらい。体にも負担があるので普段から乗り慣れている生活用の電動車椅子だと体の負荷も軽減されますし、競技以外のところでリラックスできます。今回体感してみて、かなりコンディションが良かったと実感しています。

各国の電動車椅子事情については、競技用と生活用の電動車椅子 2 台が主流みたいです。競技用の電動車椅子を予めホテルに梱包したまま送っているそうです。

各国選手も競技以外では、生活用の電動車椅子に乗っていました。コンディションを調整するという意味で徹底されている印象を受けました。空港内での移動については、空港の受付カウンターの前で梱包作業をした後に空港内の手動車椅子に乗るのですが、下の写真のように背もたれが短くヘッドレストもないので長い時間ですと首に負担が掛かりキツかったです。フルリクライニングの手動車椅子もあるのですが、どの航空会社も 2 台しかありませんでした。JAL さんへ要望とし

４．選手より報告

ましてフルリクライニングの手動車椅子の数を増やしていただきたいです。それが実現できなければ、自分の手動車椅子を用意するか、首を支えられるように背もたれに差し込める板を用意するとかひと工夫が必要と思います。

●反省と課題

①海外選手との体格差

どのスポーツにおいても言われていることだと思いますが、真っ向勝負では日本の選手は分が悪いのでうまく力を抜いていなしたり相手の力を逆に利用するなどの対策が必要と思います。

②電動車椅子性能

初速のスピードや反応の速さやパワーは本当にすごかったです。日本ではどちらかというと乗りやすい操作性に目を向けてしまうのですが、海外は乗りやすさというよりは電動車椅子サッカーに特化した操作性を求めていると思います。どうやったら相手に反応やパワーで勝てるのかを考えているのではないかと思います。乗りやすさも重要ですが電動車椅子サッカーに特化した操作性を追求するのがよいのではないかと思います。

③速いテンポのサッカー

海外のサッカーは、テンポが速くよりスピーディに進んでいきます。一方日本は緻密さを求め過ぎるが故に少しテンポが遅い気がします。それを忠実にやらなければいけないという固定概念があるからではないかと思います。しっかりと確認してから実行だとどうしてもテンポが遅くなってしまうのです。テンポを速めるためには、技術向上も重要ですが、ドリブルやパス時の球離れを速くすることでボールがスピーディに流れるのではないかと思います。

④育成

今回対戦した南米のアルゼンチン・ウルグアイはここ数年電動車椅子サッカーをやり始めたばかりなのですが、若い選手中心（12 歳から 20 歳くらい）でしたが、レベルが高かったです。海外のレベルアップの度合いと成長スピードが速く、日本は育成面で遅れているように感じました。日本の若い選手の育成は、競技普及とともに協会を通じてやらなくてはいけない事項だと思いました。

2017 FIPFA World Cup を終えて

キャプテン　＃11　塩入　新也　選手

はじめにこの　W　杯においてたくさんのご支援にご協力にと感謝の気持ちでいます。そんな状況で私自身も日の丸を背負って戦えること、2011　年から 6 年間の集大成だという強い気持ちで臨みました。また日本代表のキャプテンを担うことに気が引締まる思いでした。

前回の W 杯から６年という期間がありましたが、大きな展開として電動車椅子の進化でありました。その名は「ストライクフォース」という競技性を中心として考えられた電動車椅子は日本国内では勿論のこと世界的にも衝撃な出来事であり、新時代の幕開けであったと感じます。実際のところ今　W　杯でも使用する選手は大半を占めていました。国際化、電動車椅子と立位のサッカーに負けず劣らずパス、ドリブル、シュートと言った迫力に可能性と魅力を本戦で味わいました。

さてここからは本戦までの取り組みと内容に触れていきます。

国内の選手選考から日本代表へと８名の選手が選ばれました。これまで通り、全国の選手が国内でしっかり活躍し結果を残したメンバーでありました。全国から選手が集まる合宿は回数的にも練習は少ない状況でしたが、選手間で毎週スカイプミーティングをするなど積極的なコミュニケーションを図り戦術や対戦相手の情報対策をしてきました。

合宿では連携に連動といったスペースを使う、作るということをテーマにスペースサッカーを目指していました。人もボールも動くということ、運動量に集中力と電動車椅子サッカーは幅広い要素が濃縮されており、その意味でも魅力と日本らしいサッカーとなる大きな試みでした。

本戦では 10 か国が A プール B プールに分かれての総当たり戦を行い、上位 4 チームが順位に伴い決勝トーナメントへと進むというレギュレーションでした。グループリーグは 2 位通過でした。しかしどの戦いも厳しい拮抗した内容だったと思います。世界の強さと大きな壁を感じる瞬間がたくさんありました。最終結果は 5 位で厳しい現実と悔しさで涙が止まりませんでした。その展開でも通用すること、1 試合ごとに臨機応変に対応していくことがとても大切なことでした。私は一対一の対応力が世界の選手が優れていると感じました。例えば相手との距離感でボール保持をどの角度でボディコンタクトをするのか、抜きにかかる仕掛けをどこでタイミングを起こすか駆け引きも上手いということです。もう一つはパスを出す精度とボールスピードです。競り合う選手と接触プレーがないこともそうですが、一対一の対応力があるからこそできるスキルと感じました。

日本代表が全く歯が立たなかったと言う訳ではない、やってきた事を全力でプレーして私たちがやろうとしているサッカーは間違いじゃないと改めて感じました。これからは選手としても電動車椅子の設定とプレイスタイルに対してもっと向き合い自分なりのパフォーマンス向上に専念していきたい気持ちと、電動車椅子サッカーというスポーツを発信し、より一層選手発掘に繋げていきたいと考えています。

最後に監督・コーチ・スタッフ・アテンダント、そして応援してくれた方々に良い結果で応えられなかったことキャプテンの責任でもあります。この結果を受け止め、しっかり世界で感じてきたことを全国に還元したいと思っています。「日本はまだまだ強くなる」そのために私も前を向きしっかり取り組んでいきたいです。

４．選手より報告

「2017FIPFA ワールドカップに参加して」

＃19　内海　恭平　選手

2017 FIPFA ワールドカップに日本代表として選考され初めて国際大会に出場させていただきました。

初の海外で不安な部分ありましたが、皆に協力してもらいながらアテンダンなしでの参加となりました。

数々の代表候補合宿を経て、渡航の３週間前に「第一回日本代表合宿」が行われました。スタッフの人数、金銭面、会場確保など難しい面は多いとは思いますが、選考を早め代表合宿の回数等を増やしてほしいです。東は関東、西は鹿児島と距離がある為 Skype などでは話を詰められるものの、実際に動いて確かめ連携をとるというのが１回の合宿では難しい。

飛行機移動に関しては、特に不便は無かったけれど梱包していた車椅子が見つからないという事態がおきました。

今回、自分は選手としてフィールドに立てるのかという不安を抱えての参加でしたが、そんなリスクがある中、連れて行ってくれた監督･コーチ陣に感謝しています。誰もがグレーゾーンと言っていたクラス分けでは PF2 という判定もらい、皆と抱き合った景色を忘れません。日本代表選手して戦うこと出来ました。しかし、チームの役に立てずに不完全燃焼で大会が終わりました。

W杯の雰囲気は選手として最高の舞台でした。そこでゴールを決められたことは次につながる一歩となったと思っています。

最後になりましたが監督、コーチ、スタッフ、ドクター、アテンダントの方々の力があったからこその自分がいたと思います。

また、クラウドファンディングを初め様々な方からのご支援、ご声援に御礼申し上げます。

本当にありがとうございました。

2017 FIPFA World Cup 報告書

2017 FIPFA World Cup 日本代表　監督(ヘッドコーチ)　浅岡　俊彰

今回の日本代表には、５つの挑戦がありました。

① 安全に行って安全に帰る。

日常的に人工呼吸器使用する選手をはじめ、他選手の渡航における安全確保について、夛々羅医師・阿部看護師中心に達成できた。

国内での合宿中に、夛々羅医師・木元看護師中心にメディカルチェックを実施し、各選手の身体機能の基礎情報を把握していただいたことが大きな要因と考える。

② クラウドファンディング

487 万 5 千円という多額のご支援、ご声援ありがとうございます。このような大きな金額が達成できたのは、関係各位の日本代表に対する熱い想いをもちながら、様々な方々への働きかけをされ、想いが伝わった結果だと思います。この場を借りてお礼申し上げます。本当にありがとうございました。

③ クラス分け

適格外とＰＦ２の日本国内での判断が難しい選手を選考するか、時間を使って話し合った。国際大会参加の少ない日本は、PF1 と PF2、PF2 と適格外の境目の判断が難しい。鈴木医師・上野ＯＴのご尽力により、ＰＦ２の判定を得られた。また、ＰＦ２想定の選手がＰＦ１の判定を受けた。今大会のクラス分けでの経験は今後の日本代表にとって大きな財産となるものと考える。

④ 日常生活活動が少しの援助で可能な 2 選手の参加

日本代表団 24 名という人数枠が決まっており、当初、今大会に選手 7 名での大会参加も検討していた。代表スタッフの負担は増えたが、選手 8 名での参加が出来た。今後、PF2 選手のプレー以外でのアピールポイントの一つになってくると考える。

⑤ 結果：5 位。

選手・スタッフ・アテンダントは、一戦一戦 “勝ち”にこだわり、試合を重ねるごとに対戦国と戦うチームへと成熟させていく努力を惜しまず行ってくれた。このチームで過去のワールドカップ以上の結果が出せなかったのは、すべて私の責任。

日本代表は、5 位で満足できる国ではない。いろいろな方々の想いにこたえることができなかった悔しさが残る結果だが、各選手・スタッフ・アテンダント・応援してくださったすべての皆様に感謝しています。

ありがとうございました。

2017 FIPFA World Cup に参加して

アシスタントコーチ　三崎　賢治

2017 FIPFA World Cup にアシスタントコーチとして参加させて頂きましたので、この立場から感じたこと、また次の代表（団）へつなげられることを述べさせて頂きます。

ワールドカップまでの道のりは決して順調なものではなく、約６年の歳月を経てアメリカへ乗り込める一団が編成されました。本来ならば目標となる決戦の舞台があり、そこに向かって準備を進めていくことで、より完成された集団が作られていくはずでしたが、ワールドカップの場所や日時が正式決定したのは今から約 1 年前。それまでの間、予定されていた海外チームとの試合は中止となり、代表合宿を重ねるもいつ行われるか分からないワールドカップに向けてどう調整、選考を行っていくのかも路頭に迷うという状況が続いていました。しかしながら浅岡監督が掲げていた「安全に行って　安全に帰る」という思想は失われることなく、また決してぶれない合言葉として、多くの方々の賛同・協力を得ることができ、わずか 1 年の短い準備期間にも関わらずこの偉業を達成することができました。

選手選考においても国内の数多くの優秀な選手の中から体力面を優先に考え、最終 8 名の選手を選ぶことができました。クラス分けに全員が合格するかという疑問、海外滞在生活における介助量を分配・分担できるかという課題、何より誰一人体調を崩さずに帰ってくるという使命。結果的には上記全ての内容を見事に解決できたのは選手・介助者・スタッフの意識の高さと団結力の賜物ではないかと思います。また今大会クラス分けで適格外となった選手が居なかった（クラス分け委員会の中で適格外を出さないように、または PF２以外の区分を作ろうとしている思想があるかは不明）ことは、今後の Power Chair Football さらには日本の競技者にとっても明るい材料となったのではないでしょうか。

しかしながら国の代表として残した結果は、決して満足のいくものではなかったことは事実です。体格も体の強さも兼ね揃えた海外チームには必ず看板となる選手が居ました。日本はそれらを補うために全員が主役を張り、一丸となって戦いましたが敗れました。敗因は何でしょうか。身体機能、電動車椅子の性能、技術、準備期間、等々。決定的な差が何であるかは試合を見ていた人によって捉え方は違うと思います。私が感じたそれは「経験」です。大舞台で戦う経験ではなく、負けた試合や劣勢からどう立ち直り、どう前を向くか。それは個人に求めるものではなく、チーム全体が逆風の中に立つ経験をより多く積むことで、日の丸はもっと高いところではためくことができると信じています。そのためにも国内の競争力の強化や国際試合の経験が今後求められる課題であると感じています

最後にワールドカップはとても楽しい場所です。サッカーの楽しさ、海外文化との触れ合い、人の温かさ、何よりも居心地が良い。是非、皆で世界の頂点を目指しましょう。サッカーに関わる全ての人がワールドカップを目指したならば我が国の見る目も、我が国を見る目も変わってくるはずです。サッカーができる喜びと楽しさを発信しながら益々盛り上がっていける日本を一緒に作っていきましょう。

2017 FIPFA World Cup を通して感じたこと、やるべきこと

アシスタントコーチ　眞島　哲也

私は 2011 年秋から浅岡 JAPAN に加わり活動に務めてきました。ワールドカップを通して普段から応援してくれている仲間をはじめ、普及活動や Readyfor を通して初めてこの競技を知った皆さんから多くのご声援をいただきました。本当に感謝の言葉しかありません。関係する皆さんへ御礼を申し上げます。

今回アシスタントコーチの立場としてワールドカップを通して感じたこと、今後にむけてやるべきことを報告いたします。

1)　国際経験の積み重ねが強い代表団を作る

国内大会と国際大会では準備するものが多く異なります。私は 2012 年オーストラリアで開催された APO カップで国際大会を初めて経験しました。APO カップでは常にスケジュールが変更され、その中で柔軟性や対応力を求められることを強く感じました。これは「個」で戦うのではなく「団」で戦うという点がとても重要になります。浅岡 JAPAN には過去のワールドカップ経験選手・スタッフが多く存在し、その経験はとても心強いものとなりました。私自身も APO カップを経験しなければ、ワールドカップへ落ち着いて入ることができなかったと思います。障がいの程度もあり、簡単に国際大会へ出場できる競技ではありませんが、「安全に行って、安全に帰る」ことを大前提としながら、1 つでも多くの国際大会の経験を積むことが強い日本代表団をつくるものだと強く感じました。

2)　ワールドカップという舞台

世界ナンバーワンを決めるにふさわしい最高の舞台でした。日本で認知度が低い私たちの競技が、世界の国々で楽しまれていることを肌で感じとても興奮しました。一方で日本という国を背負って戦うこと、JIFF として統一ユニフォームで世界と戦うことに「重さ」を感じました。日本が 10 位という結果になれば、世界から「日本は世界で 10 番目のサッカーをしている国だ」と国内にいるプレーヤー全員が世界から思われてしまう。こんな悔しいことはありません。国内では全身全霊をかけてサッカーに挑んでいる選手が多く存在します。その想いも含み、ワールドカップでは代表チームとして「勝ち」にこだわる姿勢がとても重要だと改めて感じました。ワールドカップには「興奮」と「重み」があります。今後も一人でも多くの選手・スタッフが目指して欲しい舞台です。

3) 浅岡 JAPAN のサッカーが出来たこと、出来なかったこと

W 杯に向けて浅岡 JAPAN では 6 つのフォーメーションを準備し世界に挑みました。現地でのマシントラブルはもちろんのこと、日本の場合は他国に比べて渡航負担での「体調不良」 等、不確定な要素が多いこともあり、1 つの戦い方だけでは世界で戦えないと判断しました。選手選考の部分では技術面だけが優れていることではなく、ほかの選手との「連動性」や PF1・PF2 選手が個に持っている「強み」を活かせるような視点をコーチ陣で大切にしてきました。浅岡 JAPAN のサッカーで出来た大きな成果としては「強み」を出しながら戦えたこと。6 つのフォーメーションと通して、やるべきことの共通理解が選手間の「連動」を生み、ベクトルを合わせて戦うことが出来ました。一方出来なかった大きな部分としては「スペース」を活用した大きなサッカーです。理由として 1 対 1 の場面で優位になる場面を多く作れず、スペースへボールを運ぶような展開が難しい状況となりました。世界と戦うためにどのようなサッカーが日本らしいものなのか、今後も検討していく必要があります。

4) 世界トップ３との大きな差

他国と日本を比較してみると、第４位となったオーストラリア下位国については、浅岡 JAPAN のサッカーは十分に通用するものでした。しかし世界トップ 3 のフランス・アメリカ・イングランドに対しては全く通用しないことを明確に感じました。実際にイングランドと交流試合をし、アメリカと予選ラウンドで戦い、決勝でフランスを観戦しましたが、個人技術はもちろんのこと、サッカーの戦いを含めて現状の日本では全く通用しません。前回のワールドカップから６年が経ち、ここまで差が開くものかと強く感じました。

5) 今後の日本サッカーをどうしていくのか

主に日本のクラブチームでおこなわれている指導の多くは「ポジショニングサッカー」といわれるものです。オフェンスでは、まずポジショニングを指導し身体で覚えていきます。ポジション取りした選手に合わせてボールが蹴られるため、ポジショニングにいないとボールが通りません。一方トップ３の国々は「スペースサッカー」が基本であり、選手の動きに合わせてボールが動きます。それはボールを蹴る位置、トラップする位置、選手の視線など、日本が指導している「ポジショニングサッカー」とは大きく異なるものになります。ゲーム中サッカーがワンテンポ遅れる感覚です。本大会でトップ 3 のサッカーを肌で感じたとき、国内サッカーに対する大きな危機感を感じました。ワールドカップで結果を求める上では国内サッカーに「スペースサッカー」の要素を入れていくことが不可欠です。

6) 次世代育成の急務

アルゼンチンをはじめ 10 代、20 代の若い選手が多く、４年後の次ワールドカップではその選手たちが主力となることにとても脅威を感じました。フランスは電動車椅子に乗った小学生たちを代表団に帯同させ、大会会場を楽しそうに走り回っている風景がありました。日本は制度の問題もあり、幼少期から電動車椅子に乗るような場面が少なく、その点も次世代へのシフト化が遅くなっている要因の一つ。ベテラン選手ももちろん必要ですが、今後は国内次世代選手育成が急務となります。PF1、PF2 の「クラス分け」と「バランスの良い世代」がそろった代表チーム作りが長期的な代表強化に繋がるものとだと感じます。

7) 最後に

選手だけが注視されがちな障がい者スポーツですが、サポートするスタッフも慢性的に不足しています。世界で結果を出すためには選手・スタッフの「情熱」だけでは勝ち取れず、スタッフの人材確保と渡航コストが必要です。今回代表に関わった選手・スタッフは今後の競技強化はもちろんのこと、競技普及も行いながらこの競技に関わる人を増やしていかなくてはいけません。この 6 年間の日本代表活動は指導者人生において大きな経験を得るものになりました。この経験を活かし今後も「電動車椅子サッカー」を通して競技強化と競技普及に努めていきたいと思います。

以上

2017 ワールドカップ参加に対するメディカルサポートの視点からの考察

医学・学術委員会
メディカルスタッフ　チームドクター　夛田羅　勝義

電動車椅子サッカー日本代表・代表候補選手（以下代表選手）に対するメディカルサポートは、「安全に大会に参加し、試合を行い、帰ってくる」という事を目標にスタートした。なぜこのような目標になったかを考える際、重要なポイントは代表選手の基礎疾患である。日本チームの特徴のひとつは、筋ジストロフィー等の神経・筋疾患の選手が非常に多いことである。これらの疾患の特徴は、症状が進行性である事、内蔵障害（特に換気障害）が必発であるところにある。すなわち、単なる肢体不自由選手のサポートにとどまらないところが、われわれのメディカルサポートの特徴である。今回は、特に換気障害に対するサポートに重点を置き報告する。

神経・筋疾患の呼吸障害は換気不全である。したがってその究極の治療は人工呼吸という事になる。今回の代表選手には 2 名の常時使用者を含め、8 名中 3 名の人工呼吸器使用者が含まれていた。

換気不全を呈する選手に対するメディカルアプローチは 2013 年、APO Cup 終了時より開始した。神経・筋疾患の換気不全は徐々に進行するため、自覚症状に乏しい。したがって定期検査による評価が不可欠である。通常検査はかかりつけの医療機関で実施されるものであるが、代表選手として海外遠征するような選手の場合には不充分な事もあり、当委員会で独自に実施する事も少なくなかった。実施した検査は、経皮二酸化炭素分圧モニター、加速度計を併用した心拍数モニター（モニタリングは必ず練習中と休息中を含めて記録）、そして睡眠時パルスオキシメトリーである。

一方、選手に対しては何度か研修会を実施し、検査の意味、検査結果に基づいた対策等を説明し、換気不全状態が遠征時の航空機搭乗の安全性さらに試合でのパフォーマンスに大きく影響する事等を理解してもらうように努めた。また、個々の検査結果は必ず文章にして選手自身に報告、さらに必要に応じて口頭による対策等の個別指導を行った。

以上のように、メディカルサポートはまず選手教育から始まった。

ワールドカップ参加を念頭に置いたメディカルサポートは、次の 2 点に重点目標とした。

1．換気不全状態の選手の航空機搭乗時対策

周知の通り飛行中の機内圧は低下する。この機内圧低下は換気機能に余裕のない選手の場合重篤な結果を招く危険性がある。具体例を挙げると、2013 年の APO Cup の際、選手の 1 人が搭乗機上昇とともに意識朦朧となり人工呼吸を必要とする事態に陥った。同選手は、遠征前検査で人工呼吸の導入を検討すべきと評価されていた選手であった。また睡眠時のみ人工呼吸を実施しているような病態では同様のリスクが高く注意が必要であると予想された。

しかしこれは、換気不全の選手が遠征できないという事を意味するわけではない。検査結果に基づき、適切な対策をする事が可能である。その結果、実際今回のワールドカップ遠征では 3 名の人工呼吸器使用選手が問題なく参加する事ができた。

機内圧低下の程度は基本的に飛行高度によるが、使用機種により大きく違ってくる事を今回確認することができた。そのような航空機側の条件に加え、選手自身の病態、搭乗時のコンディションにも大きく影響される。したがって

具体的に事前に対応する事は困難で、搭乗中の酸素飽和度モニタリング結果を確認しながら実施しねければならない事もあり得る。

機器のトラブルに対し、特に海外の場合メーカーは一切対応しない。そこで、すべて自己で行う事になる。今回の遠征では偶然 3 名の使用呼吸器が同一であり、しかもメディカルの方で同機種を 1 台確保できていたため 2 台の予備器で対応する事とした。しかし機種が違う場合はもちろんであるが、個々で準備してもらう事が原則である。バッテリー等の準備はもちろんの事、自分にどのような準備が必要であるか、事前に充分学修してもらう必要がある。その段階でのメディカル部門の関与が重要である事は言うまでもない。

2. メディカルサポートによる競技中のパフォーマンス向上

APO Cup での試合中ベンチで必ず人工呼吸を実施していた選手がいた。この選手はすでに試合中にも呼吸器使用をすすめられていた選手であった。しかし、このようなメディカルからのアドバイスは受け入れられなかった。大会終了後ゆっくり話し合った結果、この選手が試合中の人工呼吸を受け入れられなかった理由はマスクにある事がわかった。すなわち当初使用していたマスクはその大きさから視野が妨げられるという理由であった。さっそく別の小型のマスクを紹介したところ、すんなりと受け入れてもらうことができた。

この選手の例は他の選手にも多大の影響を与えた。一度代表候補選手から外れた選手が試合中の人工呼吸導入によって、再度候補選手に復帰し最終的に代表戦となりワールドカップに参加した。換気不全の解消が選手のパフォーマンス向上に貢献する事を実証した例であった。

パフォーマンス向上に関するもうひとつの試みは、ベンチに下がった際にいかに体力の回復を図るかという課題の解決についてである。この課題解決にあたっては心拍数モニタリングの結果を参照した。その結果、リクライニング使用により心拍数の回復がよい事が証明された。姿勢保持のための固定を解除する事による換気運動が改善されたためと思われる。今後できるだけ休息時にリクライニング使用するべきであるが、代表選手には胸郭変形、姿勢保持困難な選手が多く、そのような選手は固定を解除すると再度姿勢保持する際に熟練した介助者を必要とするため固定解除を嫌がる場合もある。姿勢保持と換気機能に関する問題は今後に残された重要な課題である。

今回のワールドカップ参加において、移動中、試合中共に医学的に問題となるような重大な事態の発生はなかった。最も懸念された呼吸器系の問題は皆無であった。トラブル発生に備えた準備もすべて出番を迎えることはなかった。しかしこれはわれわれが実施してきたメディカルサポートの最高の結果と評価すべきものと考える。トラブルが発生してからの対応ではなく、事前に可能な限りトラブルの芽を摘んでおくという今回の準備が実を結んだものである。今後の海外遠征等において充分参考になり得る、また参考にして欲しい経験であった。もちろん予期せぬ事態の発生に対する準備も怠ってはならない。したがって、今回の事前準備については今後ともぜひ必要な準備であると考えている。

2017 FIPFA ワールドカップに参加して

メディカルスタッフ　チームドクター　兼　クラス分け担当　　鈴木　聖一

第３回ワールドカップ第５位、世界のレベルは上がっており、大健闘であったと思います。

振り返ってみると、いろいろなことが思い起こされます。当初の主催国であったブラジルは、あまりに遠く、行けないのではないかと囁かれました。ブラジルがキャンセルした後には、大会の存続自体が危ぶまれました。アメリカで良かったと思ったのも束の間、直行便で行けないところだと分かり、また不安が再燃しました。大きな病気や怪我をせずに帰って来られたことが一番の成果だと思います。

今回、私は、クラス分け兼メディカルスタッフとして、選手団として帯同させて頂きました。

仕事のためとは言え、強化合宿の出席率は低く、直前合宿も欠席となり、大変御迷惑をおかけしました。選手の健康管理目的に、情報ファイル作成を考案しました。しかし、筒井さんにベースを作成して頂きながら、実用化に至らず、申し訳ないことをしてしまいました。

大きく体調を崩す選手がいなかったことは、夛田羅先生の綿密な準備、そして、疲れた体に鞭打ってコンディショニングして下さったスタッフの方々、満身創痍の御自身の身体よりも選手を優先してお世話をしてくださったアテンダントの方々、皆様の御蔭です。逆に、毎日の健康チェックが手抜きだったというお叱りに対しましては、私の不手際の致すところであり、お詫び申し上げます。

クラス分けに関しましては、選手のクラス分け用診断書を渡航中に作成、現地にてぎりぎり完成させました。クラス分けが３列同時進行で行われましたが、他のスタッフの方々に助けて頂き、無事済ませことができました。不適格が危惧されていた選手も無事通過、ＰＦ２からＰＦ１に変更になった選手もおり、気持ちよく大会を迎えることができました。今後について、クラス分けについてもマイナーチェンジは行われており、国際クラシファイアーの擁立をして、情報収集していく必要があると考えます。

個人的に、今回の遠征は長期間であったため、帯同の可否の判断に苦しみました。出張扱いにしてくださった茨城県立中央病院、代診して下さった先生方、家族、多くの方々に援助して頂いて帯同が叶いました。感謝申し上げます。今後は、地に足をつけて、しっかり仕事に精進して参りたいと考えております。

大変貴重な経験をさせて頂きましたこと、改めて皆様に感謝申し上げます。

「安全に行って、安全に帰る」を支えること

メディカルスタッフ　看護師　阿部麻里

ご縁をいただき、今回初めて帯同ナースとして国内最終合宿の３日間、ワールドカップ全行程の 13 日間参加させていただいた。私のキャリアは、地方の中核病院に始まり、認知症の高齢者用グループホームの立ち上げ・運営、その後大学病院勤務、大学院での学びの後、現在の大学教員と続いてきたため、在宅で過ごされている四肢に障害がある若い人がどのように過ごされているのかを目にする機会が殆どなかった。電動車いすを使って行う競技スポーツがあることも知らなかったので、衝撃的な出会いであった。大学の研究(研究課題：電動車いすを使用するアスリートの褥瘡に関する意識調査とその実態-効果的な予防のために-)の一環として、国内最終合宿中に選手の方々にインタビューの機会を得ることができた。

褥瘡についての認識を調査する目的ではあったが、彼らへの理解を深めるために「あなたにとって電動車いすサッカーとはどのような存在、生活の上でどのような位置づけですか？いつから始めたのですか？」との質問からスタートしたため、選手一人ひとりのサッカーにかける情熱を語っていたくことができ、それにより、私自身も彼らが最大のパフォーマンスができるようサポートをしようと決意を新たにすることができた。

日本で電動車いすを使用している方は下肢だけの障害ではなく、体幹部や上肢の障害もあることが殆どであり、選手には筋ジストロフィ、脊髄性筋萎縮症の方も多かったため、軟部組織の減少や自力では効果的な除圧が困難という褥瘡ハイリスクグループととらえ、傷ができないように準備を進めた。具体的には、皮膚保護オイルの準備、皮膚保護用クッション材の準備、エアマットの手配などである。選手にも機内には、体圧分散機能のあるクッションを持ち込むように依頼した。

機内では、褥瘡対策の意味だけではないが、１～2 時間ごとにラウンドし様子を伺った。特にハードルが高く感じたのは、空港内での移動だった。空港の車いすに乗り換えた際、リクライニング機能やヘッドレストのついたものを使用できた選手はまだ負担が少なそうであったが、普段ヘッドレストを使用している選手でも、ヘッドレストのない車いすで移動せざるを得ないことがあり、それはかなり負担がかかったようだった。また体幹部に変形の大きな選手は特にアメリカの空港内での移動用車いす使用が負担だったのではないかと思われた(次ページ写真参照)。自分の体に合わせて作成されているテーラーメイドの車いすを使用できない時間が、姿勢の安定が保てず全身への負担であったと考えられた。普段、ヘッドレストを使用している人にはやはり、リクライニング機能やヘッドレストのある車いすの準備が必要だと思われる。機内では、臥位をとる選手へのクッション材の不足はなかったが、空港内の移動時、大型のアメリカの車いすでは下肢がフットレストにつかず姿勢が不安定となったり、座面の幅が広いため、身体の横に本来座面に敷く座面用のクッションを挟まないと体幹部が支えられないという事態が生じており、空港内の移動時にも体位を保持するために簡便に使用できるクッション材を考える必要があったと反省した。国際大会でのパフォーマンスを上げるには移動中の負担を減らすことが重要との観点からも、安楽な姿勢で移動することに配慮することは不可欠だろう。

【車いすの違いにより、姿勢保持への影響が大きいことを示す様子】

左側は通常使用しているテーラーメイドシートの車いすで、安定した姿勢を保持できている写真。右上段はヘッドレストもあり、リクライニング機能も付いた JAL の空港内移動用車いす。安定した姿勢を空港内での搭乗を待つ時間を過ごすことができた。一方、アメリカ国内の空港では、ヘッドレストもリクライニング機能もない大型の移動用車いすのみしかなかったため、頭を支えるのが難しかった。右下の写真では、頭と肩の間にクッションを挟み、足がフットレストに届かない左足は前輪の方向を変えて足を置いている様子。

ホテル滞在中は、入浴の介助や皮膚の観察などのために選手のお部屋に伺うことも毎日のようにあった。その際にレンタルしているベッドを逆向きに使用されていたり、ギャッジアップの使用方法が不明であったとか、レンタルしているエアマットレスが硬すぎて寝不足で困っているなど、様々な情報が得られ、その都度対処することができたので、困っていることはないか、またご本人たちが気づいていなくても必要なことはないかを察知するためにはナースのラウンドは有意義だと思われる。今回は訪問の依頼があった選手や入浴のお手伝いに通ったお部屋しか訪問できなかったことが反省点である。

大会の間は、大会を楽しもう、と心に決めていた。自国の選手だけではなく、他の国の選手ともコミュニケーションをなるべくとるようにした。国際大会で他の国のスタッフ、選手、ケアギバーと積極的にコミュニケーションをとることは、国は違っても、電動車いすを使用して競技を行うことの共通する課題や対策などは多いのではないかと思うので、今後このスポーツが普及していくには大切なことだとも感じた。またゲーム自体も私にとっては非常にエキサイティングであった。結果は 5 位であり、もっと上を目指していた選手からはもちろん「悔しいです」との声がきかれたが、今回、13 時間+3.5 時間のフライト、時差が 14 時間のある場所での戦いを課せられていた日本代表には「安全に行って、安全に帰る」という大きなミッションがあった。それをスタッフ全員が共有し達成できたことは何にも代えられない経験である。またそれには言葉通り献身的に支えてくださったケアギバーやご家族の理解、力がなければ達成できなかったことだと、感謝の念が尽きない。素晴らしいプロジェクトにナースとして参加させていただいたことを心から誇りに思う。ありがとうございました。

2017 FIPFA World Cup 報告書

メディカルスタッフ（コンディショニング担当）
クラス分け担当　上野　寿子

今回、アメリカで開催されました 2017 FIPFA World Cup（2017 年 6 月 30 日～7 月 12 日）に、クラス分け・コンディショニングスタッフとして、参加させていただきました。その中で、感じたこと・課題について報告させていただきたいと思います。

«クラス分け»

・デモンストレーションについて

合宿を通して、何度かクラス分けについて、講習を行うことで「クラス分けとは」「実際にどういうことをするのか」などについてイメージしやすくなったと思います。

今回は内海選手・内橋選手が初めてクラス分けを受けることになりましたが、クラス分け講習を受けたスタッフが 2 名いる際に、個別に実技を行うことでよりイメージしやすくなったと思います。

・事前準備について

「同意書」「診断書」が必要でしたが、当日提出するものでしたので、鈴木先生と連絡を取りながら用意させていただきました。時間もなくメールでのやりとりになってしまい、お互い理解の違いが生じてしまい、「診断書」に関して鈴木先生に作成していただくことになり、負担をかけてしまいました。もう少し前もって準備しておくことで、当日までの慌ただしい状況は解消されるかと思います。

・クラス分け当日について

当日の選手と同伴するスタッフに関しては、鈴木先生と冨田さんとで通訳とクラス分けの内容を知っているスタッフという 2 名で構成していただきました。前もって分担しておくことで、当日の動きはスムーズに進めていくことができました。

Country：Japan TEAM ROSTER (PLAYERS)

	First Name	Last Name	Classification	Status	Jersey Number
1	Atsushi	Takeda	PF1	Review	1
2	Midori	Uchihashi	PF1	Review	6
3	Yuki	Mikami	PF2	Review	7
4	Yusuke	Yoshizawa	PF1	Confirmed	8
5	Takenori	Higashi	PF1	Confirmed	9
6	Yohei	Kitazawa	PF1	Confirmed	10
7	Shinya	Shioiri	PF1	Confirmed	11
8	Kyohei	Utsumi	PF2	Review	19

内海選手のクラスがPF2、竹田選手がPF1と判断されたことで、不安の解消、チーム構成の種類の拡大につながっ

たのではないかと思われます。

«コンディショニングについて»

合宿時より介入していたこともあり、選手からの依頼もスムーズでした。ただ、後半はコンディショニングに関われるスタッフが少なくなってしまったこともあり、時間が十分に取れなかったこと・実施できない選手がいたことが反省点として挙げられる。

１）コンディショニングルームを設定し、選手に来てもらって行うこと

２）最低でも２人体制で行い、３０分を目安に実施すること　　以上が、当初の予定でした。

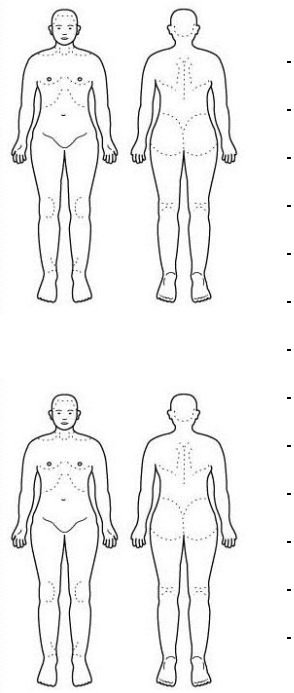
１）に関して、入浴との兼ね合いもあり、選手たちには忙しい時間となってしまい、十分な休息にはつながらなかったと思います。そのため、３日目以降は、スタッフが部屋に伺って実施することにしました。コンディショニングルームに来ることで選手・スタッフとの交流の場にもなると考えますが、疲労も考えて、移動・トランスファーの負担が減らせたことはよかったのではないかと思います。

２）に関して、三崎さん・宮崎さん・上野の３人で実施する予定でした。三崎さん・宮崎さんは他のセクションとの兼務ということもあり、後半はなかなか体制が整えられず、時間が短くなってしまったり実施できない選手が出てきてしまったりと十分なケアができないこともありました。（終了時間が 12 時過ぎになってしまうこともありました。）最低でも専属で２名、十分に対応するには３名必要かと思います。

試合の合間などには、肩甲帯・上肢のリラクゼーションなど、３名で実施することができました。エアマットも持参し、控え室で横になって休息することもでき、宮崎さんに低周波機器も持参していただくこともでき、できる限りの休息体制は取れたと思います。

予定を組んでいく手段としては、LINE はとても有効な手段でした。入浴・コンディショニングの予定を全員が把握することができ、スムーズは情報共有ができたと思います。

選手に関しての情報共有は、簡単なコンディショニングシートは作成していただいたのですが、活用には至りませんでした。実施してみて痛感したのですが、実施後にまとめていく時間が取れず、各選手に関してどの部分が疲労しやすいのか、前日はどの部分を重点的に行ったのかなどの共有ができませんでした。その都度の聞き取りになってしまい、選手の負担になってしまったと思います。 合宿時に活用し、活かしていければよいかと思います。



コンディショニングシート

５．スタッフより報告

«ベンチワークについて»

実際にベンチに入らせていただいて、感じたことについても簡単にお伝えできればと思います。

監督・アシスタントコーチ・チームドクター・メディカルアテンダントで構成されていました。各選手の必要なことに関しては、個人的に把握していたのですが、自分自身が他のスタッフにどこまで依頼できるのかが分かっておらず、他のスタッフからもアドバイスを頂き、ベンチ内で行うことも増え、始めはバタバタしてしまいました。

ハーフタイム時　①ベルトを緩める　②水分補給　③ベルト位置の調整など個別対応
ベンチに戻って　③手を温めたり首元を冷やしたりする　④キーパーユニの脱着

練習試合もあり、回を重ねるごとに、各スタッフで役割分担ができ始めました。
この点に関して、前もってベンチスタッフと情報共有する必要があり、それに当たってのデータをまとめる必要があったと感じました。（ベルト調整の位置、リクライニングスイッチの位置、アームカバーの脱着、など）
合宿時にも想定して練習を行いましたが、バイタルチェックよりも休息が優先すべきでしたので、実施する優先順位が異なりました。この点に関して、ベンチスタッフの構成も再考しても良いのではないかと思いました。

以上、簡単ではありますが、報告とさせていただきます。
最後になりますが、今回 World Cup に参加することができ、非常に光栄に思います。

この場を借りて、選手・スタッフ・アテンダントの皆様に感謝申し上げます。

「2017 FIPFA World Cup」に参加して

代表チームホペイロ（キットマン） 近末 勝司

今回の大会に参加したことを振り返るにあたり、先ずは、日本代表チームのスタッフの一人として今回の大会に参加し、「全員が、安全に行って、安全に帰る。」という浅岡ジャパンの最大のミッションを成功裏に終了できたことを率直に嬉しく思います。また、今回の大会に現地に同行し、一緒に汗をかき、様々な感動を共有する機会を得たことは、この上無い喜びであることを改めて実感し、感謝しています。これは、ひとえに、これまで電動車椅子サッカーに関わってこられた全ての皆様の苦労や協力によるものであること改めて実感し、感謝しています。本当にありがとうございます。

個人的には、海外で開催された国際大会に関わったのは、今回の大会で３回目となります。１回目は、2011 年にフランスパリで開催された「2011 FIPFA World Cup」です。この時は、登録審判員用のビデオ撮影が主役割でした。２回目は、2013 年にオーストラリアシドニーで開催された「ASIA PACIFIC ZONE OCEANIA ZONE 2013 Power chair Football Championship」です。この時は、日本代表チームのスタッフの一人として参加し、ホペイロ（用具管理）が主役割でした。そして、今回、アメリカキシミーで開催された「2017 FIPFA World Cup」が３回目となります。今回の主役割は、ホペイロ（用具管理）・キットマンでした。

以下、今回の主役割であるホペイロ（用具管理）・キットマンに関係するポイントを主として、７点について報告します。

第１に、“全選手が、電動車椅子やフットガード、必要な工具等について、主体性や積極性を持って管理出来ていた。”と実感しています。全選手が、自分の電動車椅子やフットガード等の状況について把握出来ており、必要な工具等について自己管理出来ており、電動車椅子の解体や組み立て作業の際には、お互いに協力も出来ていました。今回の飛行機での渡航に際しては、４回ほど電動車椅子の解体や組み立て作業を行う必要がありましたが、実際に作業を行う支援者（家族・ヘルパー・スタッフ等）に対して、各選手から適切な指示が出来ていました。そのため、プラスティックロールの巻き付け等を含めても、各回ともに全ての作業を１時間以内に終了させることが出来ていました。このことは、今年６月の最終合宿の際に、２時間の時間を設定し、ポイントを説明した上で共通認識を図り、実際に現地で作業を行う支援者（家族・ヘルパー・スタッフ等）が電動車椅子の解体や組み立て作業を経験しておいたこと、その際に、現地で必要な物についても確認できたこと、その後、出発前までに必要な物を不足分を含めて十分に準備できたこと等が功を奏したと思います。各回ともに、各選手が各自で準備した工具等が使用されており、ホペイロ（用具管理）として準備し、持参していた工具等は１回も使用することはありませんでした。

第２に、全選手の電動車椅子がストライクフォースであったために、前回とは異なる状況や対応となりました。今回の大会では、ボルトやネジ等の部品が不足した場合には、お互いに協力し合うことが出来ました。また、スピードテストの際に、設定等を修正する必要がある場合には、調整器の共有を図ることが出来ることから、１台あれば対応が可能であり、前回の大会の際に見られたような混乱は見られませんでした。前回の大会では、選手によって電動車椅子のメーカーや車種が異なっていたために、毎回、スピードテストの際に全選手の調整器を集約し、スピードテスト終了後に各選手に返還する作業が必要でしたが、今回は不要でした。

５．スタッフより報告

第３に、今回の大会でもスピードテストマシンが使用されましたが、過去の大会の際に使用されていたスピードテストマシンの改良されるべき点が全て改良されており、パソコンとも連動されており、非常に使用しやすいものが準備されていました。スピードテストマシンの完成形と言える出来栄えであり、今後、普及が図られるだろうと思いました。

第４に、今回の大会では、世界的にストライクフォースが主流であることやアメリカでは国産車であることに加えて、Power Soccer Shop が大会スポンサーであり、Power Soccer Shop のピットクルーが大会会場に常駐していたために、実際に、大会会場で、ある選手の電動車椅子のある部分が破損し、素人では対応困難な状況が複数回発生しましたが、いずれも、１０分間ほどで対応されたために困ることはありませんでした。このことから、今後の日本での電動車椅子サッカーの更なる普及や発展のためには、日本メーカーによる国産の日常生活用具の給付対象となる安価で高性能な電動車椅子が開発され、生産や普及が図られる必要があると改めて思いました。また、今後、日本代表チームが飛行機で海外渡航する際には、電動車椅子のメーカーやショップの専門家が同行する形が理想的であるということも改めて思いました。

第５に、昨年の４月に一般社団法人日本障がい者サッカー連盟（JIFF）が発足し、この度、アディダスジャパン株式会社の協力もあり、日本の障がい者サッカー競技７団体の統一日本代表ユニフォームが作成され、使用されることとなったこと、その発表会が、日本におけるサッカーの聖地である日本サッカーミュージアムで開催されたこと、併せて、同所において、電動車椅子サッカー日本代表チームの壮行会が開催されたことはトピックスであると思います。これらのことは、これまで、電動車椅子サッカーに関わってこられた全ての方の苦労や協力の結果であるとともに、今後、更に電動車椅子サッカーが普及し発展していくことが期待されることを示していると思います。

第６に、今回の大会においては、今回の大会オリジナルの表面プリントがされたボールが大会公式ボールとして作成され、事前に各国に配布され、もちろん大会期間中も全試合において使用されました。このことは、今回の大会を象徴することの一つであり、今大会の記憶や記録として残っていくと考えると感慨深いことであると思いました。

第７に、今回の大会においては、これまでの大会を通して、最も SNS（ホームページ・フェースブック・ツイッター・クラウドファンディング・メール・ライン等）が活用されました。ホームページやフェースブックやツイッターによる大会や試合等の情報発信、クラウドファンディングによる協力金の集約、メールやラインによる予定等の情報発信や情報共有等、これまでで最も有効活用されたと思います。

改めて、今回の大会を振り返ると、或いは、今回の大会に日本代表チームのスタッフの一人として参加してことを振り返ると、本当に様々なことがあったと実感しています。このことを、今後、更に電動車椅子サッカーが普及し発展していくために、今回の大会の報告書が作成されることはもちろん、今回の大会に関わった全ての関係者が、それぞれの地域で報告を行うこと、近日中に、一般社団法人日本電動車椅子サッカー協会（JPFA）として報告会が行われること等を通して還元が図られることを願って止みません。今回は、本当に貴重な機会を与えていただき、本当にありがとうございます。

2017 FIPFA World Cup を終えて

チームマネージャー　筒井　彩樹

この度の『2017 FIPFA ワールドカップ』への日本代表チーム派遣に際し、多大なるご支援、ご協力を頂きました各方面の皆様に、心よりお礼を申し上げます。お蔭様で無事に大会を終えることができました。これも一重に、皆様からの温かいご支援のお蔭と関係者一同感謝申し上げております。

2011 年の前回大会からの 6 年間、第 2 回 APO カップ（アジア・オセアニアゾーン大会）の開催中止やワールドカップの開催延期など国際大会の先行きが不透明な中でも、継続して日本代表選手を目指し弛まぬ努力を続けてきた選手各位には心から敬意を表します。また、強化活動にご尽力・ご協力頂いたスタッフ並びに審判員各位、いつも私共の活動にご理解頂き、選手を支えてくださったご家族・介助スタッフの皆様にも改めてお礼を申し上げます。

私は前回大会に続き、日本代表チームの一員としてワールドカップを経験する機会を頂きました。
今大会のスタッフの多くが 2013 年に第 1 回 APO カップ（開催地オーストラリア）を経験していたことは大変心強く、APO カップの報告書で挙げられた課題を意識しながら取り組みました。
チームマネージャーの仕事は選手強化・育成事業の事務作業が主な業務となります。
【担当業務】
・ 助成金事業計画の策定・助成金申請・予算管理・出納・報告業務
・ 各種イベント・合宿運営業務（イベント・日本代表候補・代表合宿の企画および運営・手配）
・ 日本代表チームの海外派遣にかかる業務全般（渡航手配・旅行代理店との折衝・備品調達等）
・ FIPFA・大会実行委員会・加盟国対応（エントリー作業・親善試合手配・問合わせ・情報収集等）
・ 関連機関・団体との調整
・ W杯に関する各種規程やガイド等の翻訳
・ 資金調達支援

実際はチーム運営全般に関与し多岐に渡りますが、詳細は冨田 GM や各担当からの報告に詳しいため、ここでは主に国際の動向と運営に絞ってご報告します。

●国際の動向
- W 杯を迎えるまで
2015 年の第 2 回 APO カップの開催中止により貴重な国際大会の機会を失っても、次のワールドカップを意識した継続的な強化活動が必要でした。ワールドカップの開催予定が見えない中でも継続的に国際連盟（FIPFA）や加盟国担当者とコミュニケーションをとり、情報収集を行いました。その過程で欧州やアジア等の複数国を参加国とする欧州主導での大会開催プランが浮上しましたが、ワールドカップの開催が次年度に決まったことで計画自体が見送りになったのは残念でした。
一方で、アイルランドが他国の指導者を代表監督に迎えたり、アルゼンチンがフランスに遠征したりとワールドカップを控えて国やゾーンを超えての積極的な活動の様子も見てとれました。

５．スタッフより報告

ワールドカップを翌年に控えた2016年秋、 欧州ゾーンで試験的に行ったことをFIPFAが採用することが多くある印象があったため、デンマークで開催されたヨーロッパゾーンのクラブ選手権を個人的に視察しました。現地ではFIPFA役員と直接コミュニケーションをとることができ、有用な情報を得ることができました。
個人的な反省としては、自分自身がFIPFAや欧州各国との接点の方が多く、アメリカや南米とのコミュニケーションが不十分であったことで大会前の親善試合の相手が欧州に偏り、南米各国の情報不足に繋がったように感じています。
- アンチドーピングについて
今大会もアンチドーピング規程は適用されることはありませんでしたが、大会期間中にFIPFA主催のアンチドーピング研修会が行われ、日本からも選手２名とチームマネージャーが参加しました。日本代表チームではこれまでもJADA（日本アンチ・ドーピング機構）のアンチドーピング研修を複数回受講し、前大会でも服薬調査を行うなどの予備知識があったため内容としては既知のものでした。しかし今回FIPFAのアンチドーピング担当者が新たに任命され、パラリンピックの正式種目認定を目指すFIPFAとしては今後取り入れなければならないトピックになると思われます。

-ワールドカップ予選
今大会、ヨーロッパとアメリカゾーンの出場国は各地域の予選を勝ち上がって参加しています。（※参加を取りやめたベルギーの１枠が開催地アメリカゾーンに与えられた。） 対してアジア・オセアニアゾーンはゾーン枠２ヶ国に対して加盟国がオーストラリアと日本の２ヶ国であるため出場が可能でした。今年に入ってアジアゾーンのFIPFA加盟国が増え、今後はアジア・オセアニアゾーンも予選の開催が見込まれます。これまで連続出場できたワールドカップですが、予選開催となれば予選時期も考慮した４年間の継続的な活動について、資金面も含めたプランニングが必要になります。

●大会運営
６年ぶりの世界大会。例えば期間中の伝達手段１つにとっても、過去の大会では選手村に設置されたメールボックスや掲示板を使用していましたが、今大会の運営本部との連絡手段は「WhatsApp」というメッセンジャーアプリを使用し、FIPFA役員・実行委員・輸送担当と各国１名のチームマネージャーでのグループチャットが大会中メインの連絡手段となりました。 また翌日のスケジュール変更や各種の重要通達はメールで配信され、大会期間中はスマホとPCを片時も手離すことは出来ませんでした。しかし、日本代表団内は主にLINEグループで連絡を取っていたため情報連携を行うには都合が良かったと思います。
このようなインフラ面が助けにもなり、タイムマネージメントもチームの自主性に委ねられていたため、送迎や招集などのボランティアが配置されることもなく、大会ボランティアも少人数で、オフィシャルも実行委員やFIPFA役員が担当するなど合理的でシンプルな運営体制である印象を受けました。
今大会の輸送はフランスの旅行会社に外注されていましたが、連絡手段にリアルタイム性があることで急な輸送変更のリクエストをする国が出てその調整ミスの煽りを受ける他チームが発生、バスの故障や送迎の集合時間を守らない国が出て全体的に遅延が発生するなど、輸送面でのトラブルは頻発していました。
しかし急なスケジュール変更は過去の経験からある程度予想できており、想定外に感じるような出来事はなかったように思いますが、度々の長い待ち時間は選手の負担になりました。

●代表を取り巻く環境の変化
2016年４月、７つの障がい者サッカー団体が参加して、「一般社団法人日本障がい者サッカー連盟（以降JIFF）」が設立されました。そして今年６月29日、公式ユニフォームサプライヤーとしてアディダスジャパン様より、日本代表チーム

に JIFF 加盟 7 団体で統一されたデザインのユニフォーム提供を受けることになりました。多くの方のご尽力により我々のワールドカップに間に合わせていただき、統一ユニフォームを着用して世界で戦う最初の日本代表となりました。

また、JFA ハウスにおける統一ユニフォーム発表記者会見と同時に、電動車椅子サッカー日本代表の壮行会の機会を与えて頂きました。公益財団法人日本サッカー協会の田嶋幸三会長、JIFF 北澤豪会長、2007 年 FIPFA ワールドカップで日本代表チームのアドバイザーを務めてくださった岡田武史様から応援のメッセージをいただき、登壇した選手・スタッフも身の引き締まる思いであったと同時に、今後このユニフォームを着用する責任を感じました。

●今後の課題

今後の課題として、強化事業や日本代表チームの運営に関与するスタッフがより一層主体性をもって取り組み、相互理解を深め、運営体制を強化していくことが必要と感じています。また、会員の皆様に対し、強化活動において得られた知識やアセットを展開し、今まで以上に強化事業への関心や理解、協力を求めていかなければなりません。
また継続的な活動資金の調達のため、強化助成金の利用はもちろんのこと、継続的に事業を支援して頂ける企業や個人の支援者を増やしていくこと必要です。そのためにも積極的な広報活動は必須です。

今回のワールドカップに関しても言えることですが、これまでも強化事業の一環として数々のイベントや強化合宿等を開催していたものの、資金的な面やその他事情により広報活動に十分注力できませんでした。
今後は広報活動を適切にタイミングよく行い、助成事業としてこれまで実施してきた事業成果を広く周知し、より一層の競技普及と発展に繋げていければと思います。

2017 FIPFA World Cup に参加して

総務　川畑ちづる

◇はじめに

今回のワールドカップ出場にあたり、多くの皆様にご支援とご協力を賜りました事、感謝申し上げます。今回私は総務・現地バックサポートとしてチームに携わらせていただきました。この競技に関わって年数の浅い中、サッカー関係ではもちろん初めての海外渡航であり、すべてが初めてで戸惑う事もありましたが、たくさんの経験と学びをさせていただいた２週間でもありました。簡単にではありますが、今回の経験で感じた事を中心にご報告いたします。

◇渡航までの準備について

今回、総務スタッフとしてチームマネージャー・日本代表 GM のサポートをさせていただきましたが、勝手の分からない中で、いただいたお仕事をこなす事で精いっぱいとなってしまいました。大会までに事務的な作業や海外とのやり取りがどのように進んでいくのか把握できていなかった事、また、本業とバランスを取りながらスムーズに作業を進められなかった事は、自分自身の反省点と考えています。

また、合宿では、サポートスタッフとして、選手の準備片付けの手伝いや水分補給時の補助、ホペイロスタッフやメディカルスタッフの補助的役割など、全体的なサポートをさせていただきました。ここで選手とのコミュニケーションを積極的にとるようにした事で、その時の話や様子をメディカルなどのスタッフに伝え、対応していただいた事もありました。こうした事は、合宿期間だけでなくワールドカップ中も活かされたのではないかと考えています。出国前のメディカルスタッフ間の連絡用 LINE に加わり、水分補給や体調不良時の栄養補給等について情報交換させていただきました。

◇渡航について

出国当日の空港への移動では、成田空港周辺に前泊した選手の荷物運搬のサポートをさせていただきました。出国まで使わないものを空港に配送されている方がほとんどでしたが、荷物を最小限にするために全ての荷物を前泊先まで持ち込まれる方もおられました。出国日の早朝から同行者１名がすべての荷物を持って空港まで移動することは困難と考え、当日に空港から比較的近い実家からの移動途中に、選手 2 名分のスーツケース計３つをピックアップし空港まで運搬しました。公共交通機関での空港への移動のためにサポートしきれない部分であったかと思われますが、今後は荷物を運搬するためにタクシーを手配するといった方法をとっても良いのではないかと感じました。

往復ともに言える事ですが、国際線は JAL の皆様の手厚いサポートがあり、電動車椅子の解体から搭乗までスムーズだったのではないかと思います。アメリカ国内線では、言葉や文化の違いから戸惑う事が多く、電動車椅子の組立場所の確定などでも時間がかかり、国内移動で１日が終わってしまいました。その他の点に関してですが、解体組立作業の間、作業をサポートするスタッフと荷物の把握を行うスタッフとにスムーズに分かれる事ができ、こういったところでもチームワークのよさを感じました。また、各選手スタッフが事前に入念な準備をされており、機内では大きなトラブルなく安全な渡航ができたと感じています。この点は他の方が書かれると思いますので、割愛いたします。

◇現地での生活について

現地では、アテンダント以外の同行者の皆様と一部のスタッフ、添乗員２名とともに、選手団 24 名とは別のホテル（ラディソン）への宿泊となりました。立地こそ徒歩での移動は難しい距離ではありましたが、ホテルでの Wi-Fi 環境が良かったり、モバイル Wi-Fi を使用して移動中も選手団との連絡が比較的取りやすい環境だった事で、情報のやり取り

に関しての不便さは少なかったように感じます。スケジュール確認や変更などについて選手団側のスタッフと連絡を取り、添乗員の方と調整をしてその都度ラディソンに宿泊されているご家族にお伝えする事も度々ありましたが、全体的にスムーズなやり取りだったのではないかと思います。

選手団の宿泊するホテル（ゲイロード）では、選手のケアや入浴介助の対応でスタッフが多忙だったように感じました。別ホテルではありましたが、そういった部分での補助などができたら選手団側スタッフの休息も取りやすかったのではないかと思います。また、ラディソンのほうが買い出しに出やすい立地であったので、ゲイロード滞在の選手スタッフには必要なものの買い出しを行う旨を伝えていました。実際は、想定していたよりも選手団とご家族の接触できる時間が多くあり、それぞれ必要な物品も家族内で完結できるケースがほとんどだったように思います。ただ、選手と介助者１名で来られている方や選手単独で来ている方に関しては、買い物サポートが必要だった場面もあったので、今後の国際大会でもこういった方へのサポートは必要ではないかと考えます。

◇大会期間中について

練習会場や控室など、予想していたよりも比較的オープンな環境で、公式練習の期間中から他国の選手やスタッフ同士でフランクに会話している姿もよく見かけました。あくまで推測ではありますが、話の流れから様々な情報交換がされる事もあるかと思います。国際試合の経験が乏しく、共通言語である英語での会話が得意でない日本代表にとってはウィークポイントであったのかもしれません。そうしたさりげないところからの情報収集が大事だという事をゲームを通じて感じましたので、今後はそういった部分でバックアップをしていけるよう自己研鑽に努めたいと考えています。

自分自身の反省点として、ゲームの際には工具類をベンチに持ち込むように伝えていなかった事が挙げられます。ゲーム中のマシントラブルがあった際に即対応できる用意が万全でなかった為に、転倒防止タイヤが脱輪した車椅子の修理がハーフタイム中にできなかった事がありました。運営サイドの柔軟な対応で、無事にベンチまで工具を届ける事が出来ましたが…。ただ、それ以外に大きなマシントラブルがなかったのは一つの成果ですし、パワーサッカーショップがブースを設けていたため、万が一何かしらのトラブルがあっても対応してもらえる環境であったのは大変心強かったです。

◇最後に

他国には、日本の選手と比べて年齢の若い選手や経験年数の浅い選手が多くいました。それでも世界の舞台で互角に戦える選手ばかりです。日本が今後海外で成績を残せるチームになるために、若いうちからこの競技が始められる環境であったり、世界で活躍できる若い選手を育てる環境の整備が必要であると考えます。その中で、今年から10km/h で日本選手権を戦える環境というのは、将来的にもプラスになると強く感じています。ただ、この競技はコミュニケーション力が一番大切であるという事も様々な場面で実感しました。選手同士、スタッフ同士、選手とスタッフ、他国チームと…など、挙げるときりがありません。若い選手の育成には、こういったプレー以外の面でも成長が必要だという事を伝えていきたいと思っています。

今回のワールドカップは、どの試合も日本時間の深夜～早朝という観戦が難しい時間でしたが、多くの皆様からリアルタイムの応援をいただきました。あの盛り上がりを今後さらに広めていきたい、この競技の魅力を多くの人に知ってもらいたいと感じ、模索する日々です。

最後になりましたが、あらためてあたたかいご支援とご協力、力強い応援をくださったすべての皆様に感謝申し上げます。また、日本代表の選手、代表をサポートしてくれた選手、一緒に過ごしたスタッフやご家族介助者の皆様には、本当に結束力の強いチームの一員として素晴らしい経験をさせていただき、感謝の気持ちでいっぱいです。そして、次の国際大会に向けて、技術もチーム力も、より強い日本代表になりましょう。

2017 FIPFA World Cup に参加して

―日本代表選手団バックサポートオフィス（分析担当）の取り組みから―

天岡　寛（吉備国際大学），小林雅夫（JPFA 技術委員会）

１．　事前準備

「分析担当」としての代表団帯同が決定後、どのような点を分析し、その結果をどのような方法で代表チームに伝えるかを話し合い、下記のように決定した。

●分析する点

対象チームのフォーメーション

各プレーヤーの特徴、戦術的・戦略的な役割

日本代表チームのコーチからの要求による個々の分析

●代表チームへの伝え方

戦術担当のアシスタントコーチにのみ分析結果を提供する。

基本的に、チーム戦術には関与しない。

（混乱を招くことがないように、分析結果の提供を一本化することとした。）

① 最終合宿でのシミュレーション

最終合宿において、上記の決定を代表チームのコーチ・アシスタントコーチに伝えた。また、練習試合において簡単な分析を行い、戦術担当のアシスタントコーチに分析結果を伝え、その分析結果をコーチ陣で話し合ってもらう、という本番を意識したシミュレーションを行った。

尚、World Cup では分析チームとコーチ陣のホテルが異なるため、開催地で情報を伝達する方法を「LINE」で行うことを決め、「分析チーム」と「戦術担当アシスタントコーチ」とで「LINE グループ」をあらかじめ作成した。

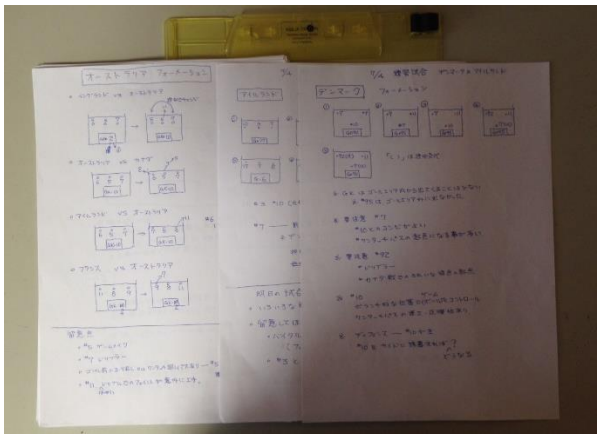
尚、選手から「各レフェリーの 2on1 などにおける空間認識の分析」の要求があったため、分析事項の追加分とした。

② 事前の情報入手

海外との交流等がない日本において，事前に得られる情報は限られるため，インターネットを利用し、各国のリーグ戦等の映像や SNS 等で発信される画像データから事前の情報入手を行った。また、2016 年 7 月にデンマークにて行われた European Champion’s Cup に映像データも参考とした。

２．　World Cup での分析実施事項

現場（会場）での分析（メモ）、ビデオ撮影映像によるその分析の確認、その後に分析チームの２人で話し合い、最終分析を決定するという方法で分析を行った。



① 開催までの期間（現地）

各国の公開練習及び公開練習試合を視察し情報を収集、分析の基本情報とした。

また、コーチ陣の要求に基づき、他国間の練習試合における得点の分析を行い、その分析結果を提供した。

② グループリーグ

対戦予定国の分析を行い、アシスタントコーチに提供した。

大会２日目は、ビデオ映像による確認の時間がなかったため、会場での分析結果の情報提供（LINE）となった。

③ トーナメント

グループリーグ時に、トーナメント対戦国を予想し、手分けして分析を行った。

ビデオ映像による分析確認後に、分析結果の提供を行った。

３．　　将来に向けて

「分析担当チーム」が代表団に帯同するのは、初めての試みである。

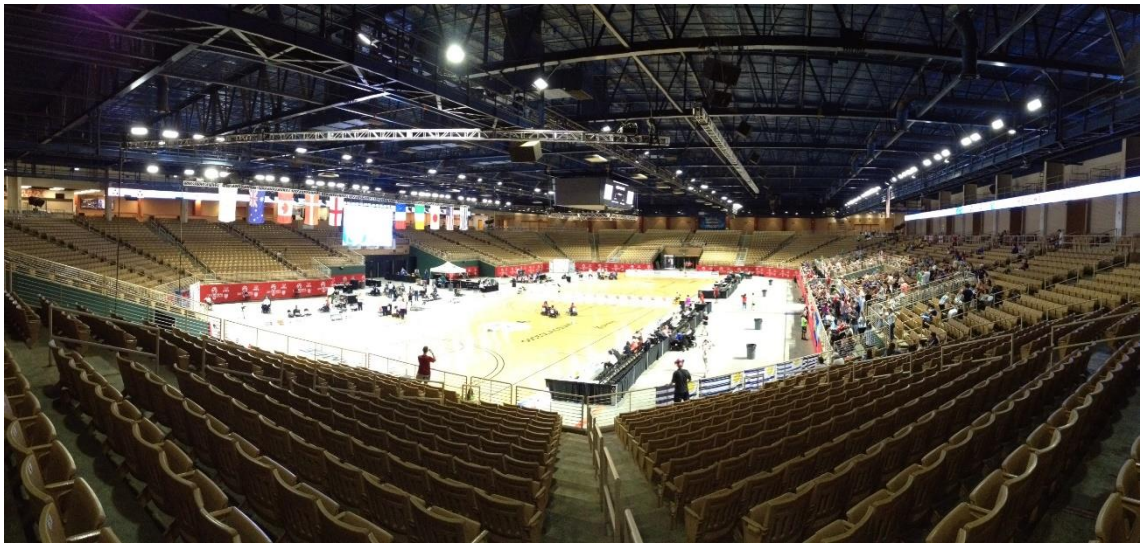
今大会で、会場での分析実施時に他国も分析を行っている姿を目にした。

イングランドは対戦予想国の試合のビデオ撮影をしており、オーストラリアはベンチしていないスタッフ（おそらく分析担当）と監督が観客席で話し合いながら対戦予想国の試合を見学し、メモを取っていた。他参加国も同様のスタッフの姿を目撃している。

今後は、このスポーツも競技的な側面が大きくなることが考えられることから、ベンチ入りしない分析担当のスタッフが必要な役割を果たすことが求められると考えられる。

また、初参加となった南米の参加国にも注目しなければいけない。日本と接戦となったアルゼンチンは、２０１３年にこの競技が始まった。ウルグアイも同様な時期にこの競技が始まっている。この２国、その後は１年に１回は国際試合を経験していることが、今回の World Cup での堂々とした戦いの源となっていることは間違いないであろう。

今後は、普段からの世界的な動向の情報入手が重要になると考えられる。その情報を、全国的に発信し、この競技に関わる全ての人で分かち合うことが、これからの日本におけるこの競技の発展につながっていくことになるのではないだろうか。



2017 FIPFA World Cup に参加して ―Speed TEST について―

天岡　寛（吉備国際大学）

Speed TEST の方法については，FIPFA が 3 つの方法を提案している．国際大会においては，2011 年から Speed TEST マシンを用いて測定している．違反による再測定は 1 回のみであり，試合に出場できないかもしれないという不安感は，パフォーマンスを低下させる要因の一つになると考えられる．そこで本研究室では，ヴィゴーレ岡山（現在廃部），国立松江工業高等専門学校の協力を得て新規 Speed TEST マシンを開発した．さらに，日本代表候補合宿等において，最高速度設定に対する不安を取り除き，国際大会におけるストレスを軽減させることを目的として検討してきた．

国内において，これまでの測定機器をコンパクトにしたものを作成し，旧型及び Run による測定との誤差等について検討した．その結果，新型マシンでの測定に問題ないことを確認した．

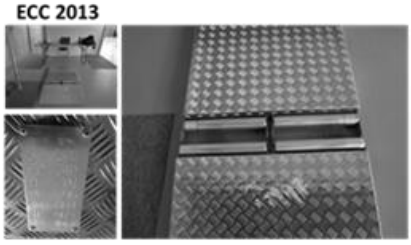
2016 年 6 月，2017 FIPFA World Cup に向けて Power Soccer Shop が新規 Speed TEST マシンを開発中であるという情報を得た．これまでの形状と異なるが測定の原理は同じであった．

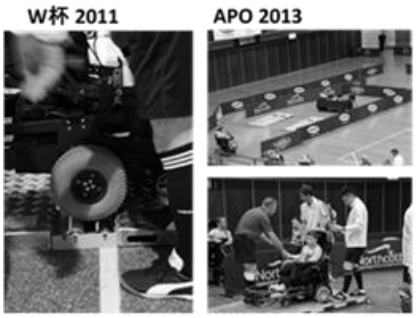
練習会場において，FIPFA 役員からマシンの説明を受け，実際に使用することができた．また，開発に関わるプロセスや特徴についても聞くことができた．

特徴として，測定時の左右の回転数の差が PC 画面で視覚的にもわかりやすいことが挙げられる．これにより，左右の回転数の差異による再測定が軽減し測定時間が大幅に短縮された．，つぎに，前方から入り前方から出ること．測定部ローラー間の段差をなくすための補助バーも片足で自由に上下させることができた．これにより，後方キャスターを上げる必要がなくなり，時間短縮につながっていた．

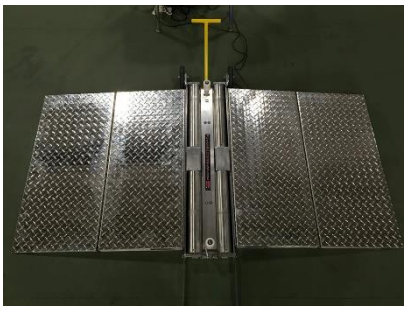
測定においてもストレスが軽減されており，大会の円滑な運営に寄与することができていた．

一方，課題として，測定時の回転数の回転数の幅について明らかにすることができなかった．これを解決することは，国内大会における導入において重要な課題になると考えられた．





2017 FIPFA World Cup



5．スタッフより報告

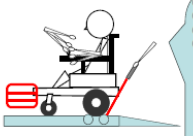
第74回日本体力医学会中国・四国地方会　平成26年11月22日（土），23日（日）
加計学園国際学術交流センター

電動車椅子サッカーにおける速度規定測定方法について

○天岡 寛，竹内　研
吉備国際大学 社会科学部スポーツ社会学科

吉備国際大学

速度規定測定器（スピードテストマシン）計測法



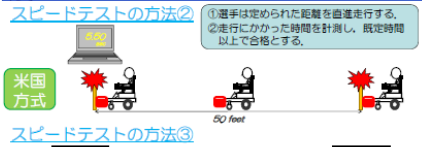
①選手はジョイスティックから手を放す．
②第３者がジョイスティックを操作する．
③速度が安定したところで左右の計測を行う．
④左右の数値をPCに入力し時速に換算する．
（左右の回転数差：10rpm以下）

背景

スピードテストの方法②

①選手は定められた距離を直進走行する．
②走行にかかった時間を計測し，既定時間以上で合格とする．

米国方式



スピードテストの方法③

日本方式

背景

スピードテストの方法①における問題点

○測定機器類が大がかりである．
○測定に時間がかかる．

国際大会で使用

スピードテストの方法②③における問題点

○規定時間以上で合格となるため，時速が不明である．
○後進による測定が困難である．

国内大会で使用

目的

スピードテストには3つの方法があるが，国内大会においては最も簡便な測定方法（スピードテストの方法③）しか行っていない．

問題点
国内で用いている測定方法では，後進の測定を行っていない．
⇒「後進速度が速いのではないか？」と指摘される選手の存在
国際大会においては，スピードテストマシンで測定する．
⇒最高速度規定違反による再設定がパフォーマンスを低下させる懸念

JPFA日本代表強化委員会：電動車椅子の最高速度設定に不安
国際大会におけるストレス軽減

第2回アジア太平洋オセアニア選手権(APO Cup 2014；神戸市 1月)に出場する日本代表候補選手を対象に，異なる速度規定の測定方法について検討した．

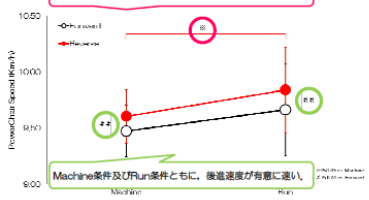
方法

- 対 象 者：APO Cup2014日本代表候補選手12名（男性10名，女性2名）
  年齢：26.6±4.1歳
  対象者は筋ジストロフィーなどの重度身体障害をもつ．
- 競 技 歴：11.9±3.3年
  対象者は国内最高峰の大会である日本電動車椅子サッカー選手権大会に4回以上の出場経験があった．
- 測定方法：FIPFAが提案している3つのスピードテスト方式のうち，2つ
  測定は，ランダムに行った．
  ○W杯など国際大会で用いられる方法　→　スピードテストの方法①
  ○国内大会で行われている方法　→　スピードテストの方法③
- 統計処理：対応のある t 検定を用いた．
  統計的有意水準は，５%未満とした．

インフォームド・コンセント
本研究の対象者については，ヘルシンキ宣言の趣旨に沿って研究の目的，方法，期待される成果，不利益がないこと，危険性を十分排除した環境とすることなど十分な説明を行い，研究参加の同意を得た．

結果

Machine条件と比較して，Run条件で有意に速い．



Machine条件及びRun条件ともに，後進速度が有意に速い．

Fig 1．異なる速度規定測定方法から算出された電動車椅子の速度の比較

考察

仮説
Machine条件：駆動輪の回転数のみ測定するため抵抗　小　速い
Run条件　：前輪の接地抵抗および転がりによる抵抗　大　遅い

結果
速い
遅い

なぜMachin条件が遅かったのか？

○駆動輪（タイヤ）と測定器（ローラー）との関係

本研究条件において，タイヤと接触する素材が異なる．

競技を続けることで，電動車椅子のタイヤは消耗する．
消耗したタイヤはグリップ力を失う．
Machine条件とRun条件とでは，タイヤと接触する素材が異なるため，タイヤとの摩擦抵抗が異なることが考えられる．
実際に，スピードテストの方法①測定中に，タイヤが測定器の上で空回りすることもあった（再測定した）．

Machine条件における測定器とRun条件における木の床では，タイヤと接触する素材が異なるため，タイヤとの抵抗が変化した可能性．

考察

仮説
Machine条件：駆動輪の回転数のみ測定するため抵抗　小　速い
Run条件　：前輪の接地抵抗および転がりによる抵抗　大　遅い

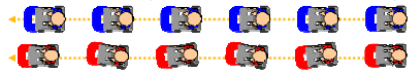
結果
速い
遅い

なぜRun条件が速かったのか？

○車椅子が直進できていない可能性

電動車椅子は，左右の異なるモーターが駆動することで，前進・後進・旋回を行う．

競技規則において，前進後進の速度規定はあるが，旋回に関しての規定はない．
旋回速度だけでなく反応速度を上げることで，車椅子を素早く回転させることができ，ボールをより強く蹴ることができる．多くの選手は，旋回速度を10km/h以上に設定している．



電動車椅子の旋回速度や反応速度の設定が，前輪の接地抵抗および転がり抵抗を上回った可能性．

まとめ

第2回アジア太平洋オセアニア選手権(APO Cup 2014；神戸市 1月)に出場する日本代表候補選手を対象に，異なる速度規定の測定方法について検討した．

○駆動輪（タイヤ）と測定器（ローラー）との関係
Machine条件における測定器とRun条件における木の床では，タイヤと接触する素材が異なるため，タイヤとの抵抗が変化した可能性が考えられた．
○車椅子が直進できていない
電動車椅子の旋回速度や反応速度の設定が，前輪の接地抵抗および転がり抵抗を上回った可能性が考えられた．

国内大会とは異なり，最高速度規定が速い国際大会では，瞬間的な動きで競い合う機会が増える．Run条件を基に電動車椅子の速度を設定している日本代表選手は，規定されている最高速度より低く設定されている可能性が高いことが明らかとなった．このことは，特に速さで競った場合，日本代表選手にとって不利になる可能性を示唆する．

第77回日本体力医学会中国・四国地方会　2016年6月11日（土）12日（日）
福山市立大学研究棟1階　中講義室A

電動車椅子サッカーにおける速度規定測定方法について
―簡易測定器作成をめざして1―

○天岡 寛
吉備国際大学 社会科学部スポーツ社会学科

吉備国際大学

目的

国内大会でのスピードテストマシンの導入を目指し，コンパクトに収納できる簡易型速度規定測定器を作成した．

本研究では，電動車椅子サッカーにおける車椅子速度設定の測定方法について，従来の速度規定測定器と規定距離走行タイム計測法に加え，我々の考案した簡易型速度規定測定器の3つの条件を比較し検討することを目的とした．

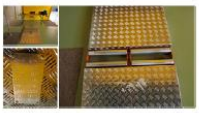
方法

- 対 象 者：次期日本代表を目指す若手選手19名（男性17名，女性2名）
  年齢：24.4±6.9歳
  対象者は筋ジストロフィーなどの重度身体障害をもつ．
- 競 技 歴：8.4±5.2年
  対象者16名に日本電動車椅子サッカー選手権大会の出場経験があったが，必ずしも各チームにおいてレギュラーではなく，競技レベルが高い選手ではなかった．
- 測定方法：FIPFAが提案している3つのスピードテスト方式のうち，2つとした．
  測定は，ランダムに行った．
  従来の速度規定測定器　：Old Machine条件
  簡易型速度規定測定器　：New Machine条件
  規定距離走行タイム計測法：Run条件
- 統計処理：条件間の比較：一元配置分散分析
  条件内での前進後進の比較：対応あるStudentのt検定
  統計的有意水準は，５%未満とした．

インフォームド・コンセント
本研究の対象者については，ヘルシンキ宣言の趣旨に沿って十分な説明を行い，研究参加の同意を得た．

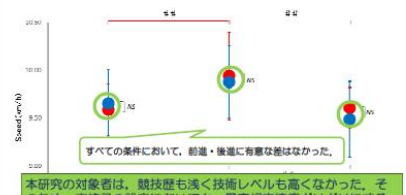
方法

も
我々が開発したもの（New Machine条件）
左右を分割し，組み立て式とした．
後方から侵入することでコンパクトになった．
デジタル表示で速度が一目でわかるようになっている．これまでの報告を参考に，補正された値が出る．



も
従来の速度測定器（Old Machine条件）と同等のもの
大きく重い
持ち運ぶことが困難
優入は前方からである．

結果

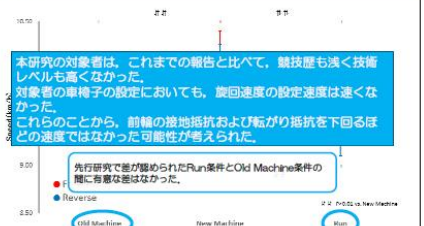


すべての条件において，前進・後進に有意な差はなかった．

本研究の対象者は，競技歴も浅く技術レベルも高くなかった．そのため，車椅子の設定においても，最高規定速度ギリギリにすることはなかったことによるものと考えられた．

Fig 1．異なる速度規定測定方法から算出された電動車椅子の速度の比較

結果

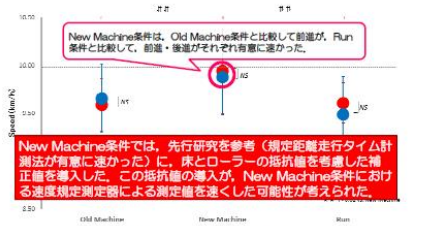


本研究の対象者は，これまでの報告と比べて，競技歴も浅く技術レベルも高くなかった．
対象者の車椅子の設定においても，旋回速度の設定速度は速くなかった．
これらのことから，前輪の接地抵抗および転がり抵抗を下回るほどの速度ではなかった可能性が考えられた．

先行研究で差が認められたRun条件とOld Machine条件の間に有意な差はなかった．

Fig 1．異なる速度規定測定方法から算出された電動車椅子の速度の比較

結果



New Machine条件は，Old Machine条件と比較して前進が，Run条件と比較して，前進・後進がそれぞれ有意に速かった．

New Machine条件では，先行研究を参考（規定距離走行タイム計測法が有意に速かった）に，床とローラーの抵抗値を考慮した補正値を導入した．この抵抗値の導入が，New Machine条件における速度規定測定器による測定値を速くした可能性が考えられた．

Fig 1．異なる速度規定測定方法から算出された電動車椅子の速度の比較

まとめ

電動車椅子サッカーにおける車椅子速度設定の測定方法について，従来の速度規定測定器と規定距離走行タイム計測法に加え，我々の考案した簡易型速度規定測定器の3つの条件を比較し検討することを目的とした．

本研究の対象者は，競技歴も浅く技術レベルも高くなかった．

本研究の対象者の車椅子の設定も，先行研究と比較して，旋回速度の設定速度が速くなかったが，前輪の接地抵抗および転がり抵抗を下回るほどの速度ではなかった可能性が考えられた．

New Machine条件では，先行研究を参考（規定距離走行タイム計測法が有意に速かった）に，床とローラーの抵抗値を考慮した補正値を導入した．この抵抗値の導入が，New Machine条件における速度規定測定器による測定値を速くした可能性が考えられた．

スピードテストには，電動車椅子のタイヤと接触する素材が異なることが影響を及ぼすのではなく，車椅子設定（前・後進，旋回，反応）に対する選手の操作能力が影響を及ぼす可能性が考えられた．

FIPFA WORLDCUP 2017 総括

～代表強化事業の計画実施・代表強化合宿・W 杯本大会を経験して～

FIPFA ワールドカップ 2017 日本代表選手団 副団長兼 GM
JPFA インストラクター・技術指導部長 冨田 昭

＜代表強化委員会から技術委員会への管轄移行について＞

2007 年に初めて FIPFA ワールドカップが東京で開催されるにあたり、日本電動車椅子サッカー協会（当時任意団体）において「代表強化委員会」が設けられ、高橋前会長（FIPFA 役員兼任）や通山代表強化委員長の下、ワールドカップ東京大会（2007 年）、パリ大会（2011 年）および初の APO ゾーン大会としての 2013 年 APO カップシドニー大会に向けた日本代表選手団が組織されたことは、JPFA としての大きな足跡であることは言うまでもない。

2013 年の APO シドニー大会より、第 3 代浅岡日本代表監督（ヘッドコーチ）が日本代表チームの指揮をとり、筒井事務局国際担当などのご尽力により次世代選手の強化育成イベント・JPFA クリニックなど開催。2015 年初頭の APO 神戸大会に向けて機運を高めていたと思われる。2015 年の APO カップは、翌年開催（2016 年ブラジル予定であった）のワールドカップに向けた予選大会としての意味合いもあった。結果的には、参加国の辞退や当協会として予算不足・FIPFA レギュレーションを満たせないといった状況が重なり、APO カップの日本開催には至らなかった。

当方はレフェリーの派遣調整を担当し、現 FIPFA レフェリーの統括役との間で連絡を行っていた中での開催中止の決定となり、日本の国際審判員候補にとっても非常に厳しい結果となった。

2016 年に JPFA は一般社団法人となり新しい運営組織となったが、代表チームの強化といった視点でみると約 3 年間国際試合経験を積み上げることが出来ず、経験面において遅れをとり、世界の強豪国との実力差が広がった要因とも考えられる。日本が置かれている物理環境的な状況も当然ながら大きな障壁となっている。

私自身が選手・指導者の強化に関わる機会は、2016 年 3 月に理事会より「JPFA インストラクター」の任命を受けたことに始まる。また同時期に 2017 年 7 月にアメリカ合衆国フロリダ州キシミーでのワールドカップ開催が明確になったと記憶している。

JPFA インストラクターとして初めの仕事は、「指導者育成」という命題の下、選手および指導者のパスウェイ作り（グラスルーツからエリートへの道筋作り）と、技術委員会メンバー候補の選出と依頼、および「旧代表強化委員会→技術委員会」への代表関連事業の移行という目的で大会までの事業ロードマップ作成を実施した。

ワールドカップまでの事業ロードマップとして、筒井技術委員会担当理事および浅岡代表強化委員長代行の協力の下、選手指導者強化育成イベント（エリートプログラム）の実施を経て、代表強化合宿 4 回を実施し大会に臨むという流れを作成した。協会の財源状況において、代表強化事業を実施するためには、JSC（日本スポーツ振興センター）助成金の申請活用以外の選択肢は無い状況であると考えられた。上記イベント・合宿の計画実施および、国際経験から乖離している環境を少しでも埋めていく必要性があったため、代表監督や技術委員の国際視察を 2 回程度委員会事業として組み入れて、技術委員会の事業計画を策定させていただいた。

2016 年 5 月に技術委員長代行として、理事会において事業に関する承認をいただいたが、「日本代表」という名誉ある活動については、理事会や委員会を跨いだ「横断的な活動であるべき」との指針が示されたため、JPFA インストラクターという役割も意識して、JPFA 内の「協業」であることを念頭に活動を遂行した。

６．大会参加総括

＜競技に関して　車椅子操作能力・ボールなどから＞

日本の置かれた状況として、国際試合経験が乏しく、2011 年のフランス大会以降では、2013 年に実施された APO カップシドニー大会でオーストラリアチームと対戦して以降は、国際試合を通じて「強化すべき課題」を明確にする機会を持つことができなかった。WEB 配信される映像などで、世界のクラブチームの動向をある程度見極めることはできたが、ワールドカップに向けて各国がチームとしての完成度を高めて、かなりの国が想定以上のレベルアップがなされていた印象を持った。日本国内のトップ選手について、戦術・ボール精度・スピードなど一定の強化は図れていたが、世界のレベルアップの状況を意識して、流れの中でのパス連携・1 対 1 のスキル・車椅子操作能力・車椅子のセッティングなど、上位 3 カ国とレベル差を埋めていく取り組みが重要である。

トップ 3 のチームについては、ワンタッチコントロールでパス展開できるスキルがあった。サイドの深い位置からボールを折り返す技術、トップスピードでボールを折り返す技術など日本のプレーヤーでは難しいスキルを有していた。

ほぼストライクフォースオンリーの大会となっていたが、様々なセッティングの工夫がうかがえた。リアキャスターと床面の間に隙間を設けているトッププレーヤーが目立った。（前進や旋回の際、わずかにフロントキャスターが浮き上がっている）

プレーの質として「旋回速度の速さ」「旋回キック時にややフットガードが持ちあがる」といった状況がみられた。前方への加速時にタイミングよく「前突き」すると、バウンドコントロールされたパスやシュートがおこなえていた印象がある。

アメリカチームのウォーミングアップは連続した前突きを反復して実施しており、加速時に前突くタイミングを確認するなど、非常に高いキックの質を要求しているように思われる。フランスとイングランドのウォーミングアップは、車椅子操作のコーディネーションを中心に確認していたと思われる。最高速での前進からぶつかる寸前に方向転換する練習や、コート状況に応じた適切なジョイスティックコントロール（必要以上に動かしすぎないなど）を意識したコーディネーショントレーニングである。

ストライクフォース・ヘビーウエイトバージョンをアメリカ選手 3 名が使用していた。車椅子最後方に 3kg の板状の錘を縦積みに搭載してあり、リアガードも 3cm 程度長い仕様となっている。搭載バッテリーも大型である。プレーヤーはすばやい切り替えしと強い旋回キックを両立しており、その仕様については非常に興味を覚えた。駆動輪より後部に重さを加えることでより攻撃性を高めることができる印象をもった。

ある程度リア側にウェイトバランスを高めることで、「動作の初速」「キックの質（ドライブがかかり安定した転がり）」「キックの速度」等に影響があるものと予想される。

日本チームは車重が他国より軽量な印象がある。軽量化しているメリットが今回の大会に関してはあまりうかがえなかった。また全幅の狭い（Narrow）タイプは、競り合いなどではかなり厳しい状況であったと思われる。

大会使用球は現在国内で唯一公式球として使用されているモルテン製と比較すると、重く弾みにくい性質のものであった。例えると屋外用のサッカーボールとフットサル用ボール程度の違いがあった。重く弾みにくい性質であるため、当然ながらキック時のボールスピードは低下し、また浮き上がりでのボールデッドは減少できる効果があると思われた。ボールが軽度浮き上がった状態で、フットガードにボールを当てると浮き上がり易いといった状況が生まれるため、安全性を配慮すると国内でも同質のボールを使用していくことも方向性として提案していく必要性もうかがえた。

＜審判適応について（タッチラインジャッジ・フットガードの解釈について）＞

大会においてルール変更は特に直前レギュレーションには盛り込まれなかった。

但し、ライン際でボールを挟んだままボールデッドとなった場合、かなりの割合で内側のプレーヤーが押し出したと判定されるケースが目立った。内側のプレーヤーがコート内にとどまっている場合でも考慮されない傾向があった。

＜リアガードの実情（EX リアガードに頼った競技実施が抱える問題）＞

今回の日本代表チームはエクストラ・リアガード（延長された後方ガード）の使用をしない状況で大会に臨んだ。大会においては、イングランドおよびオーストラリアチームのGK計３名が、パワーサッカーショップ製のエクストラガード（約10cm弱）を使用していることが確認できた。FIPFA審判団に確認したところ「現在は明確な規定はない」との判断で、公式戦においても使用している様子が見られた。但し、イングランドの選手は格下チームとの対戦では装着していないにも関わらず、強豪チームとの対戦時に装着して出場したという事実が確認できた。

ヨーロッパの大会役員複数名に、エクストラガードについて質問をさせていただいたところ、「全長に関する規定」は存在するとのコメントを得ている。この点についてFIPFA関連文書に明確化はされていないが、「135cm or 140cm」といった具体的な全長規定が今後設けられる可能性を感じさせるものである。

＜スピードテストについて＞

今回の大会は「機械計測でのスピードテスト」を実施した。車椅子の昇降が一方通行であり、計測しやすいシステム（左右差が視覚的にＰＣ表示される）に改良されており、測定する審判員、選手の負担はかなり軽減されていたように思われる。

＜車椅子の使い分けと選手の身体的機能＞

日本選手は競技用車椅子（ストライクフォース）に常時乗車している状況であったが、日本以外の国の選手は、試合や練習以外の時間は日常生活用の車椅子に乗車しているようであった。明確に競技用と生活用を使い分けていた。

選手の身体機能について、たとえPF1のプレーヤーであっても体幹安定性が高いプレーヤーが殆どであった印象がある。日本のように進行性の神経筋疾患で身体の中枢部の麻痺進行が著明かつ呼吸機能障害を伴うプレーヤーはほとんど見かけなかった。（アメリカ選手１名は人工呼吸器使用）

各国から日本チームを見た印象として、非常に身体面の障害が重いプレーヤーが多い中でよく戦っているという印象を与えたと思われる。

＜車椅子の分解・梱包・組み立て＞

今回のワールドカップ会場はフロリダ州キシミーであったが、近隣の主要空港はオーランド空港であった。日本国内からオーランドへの直行便は就航していないため、経由地乗継でのフライト計画が必要となった。

電動車椅子を航空機へ搭載する場合、事前に申請は必要なものの国内主要路線（100 席未満の航空機では不明）では、コントローラー部を外してモーターへの通電ができない状態であれば特に分解・梱包が不必要であると思われる。（リチウムイオンバッテリー搭載車は要確認）

今回国際線は日本航空、アメリカ国内線はアメリカン航空の利用をしたが、搭載に当たっては分解・梱包が必要となったため、往路復路で計４回の作業を実施した。

国際線（JAL）搭乗時の分解・梱包は保安検査前に実施したため、作業に必要な工具は受託手荷物（預け入れ荷物）として対応できたが、アメリカ国内線においては保安検査前の分解・梱包は認められず（理由は不明）、工具や車椅子やプレーヤーの身体チェック（金属探知機やボディスキャンをかけられないため）、薬物反応検査などに多くの時間を必要とした。アメリカ国内線のセキュリティの厳しさを痛感した。

アメリカ国内線の移動は座席数200名弱の機体（ボーイング737、757、エアバスA321）であり、一度に搭載でき

る電動車椅子数が制限されたため、フライトを 2 便に分けるという対応が必要であった。当初滞在ホテルの出発時間も便毎で分けていたが、空港への移動を同時刻でおこなった。ダラス空港で航空会社対応や保安検査に予想以上に時間を要し、先発便の分解・梱包作業を優先的に実施して、なんとか出発時刻に間に合わせたという事態が発生した。

＜クラス分けの動向について＞

日本代表選手のクラス分けの結果は、PF1 が 6 名、PF2 が 2 名と判定された。PF1 判定のうち 4 名は「確定（confirm）」、2 名は「Review」。PF2 判定の 2 名は「Review」となった。全員クラス分け判定でプレー適合となった。今後の国際大会派遣において、一つの目安ができた格好となり、意義のある結果となった。日本チームに限れば、出場選手のクラス分けを考慮せずに選手起用ができる状態となった。

今回のワールドカップに出場登録された全選手 78 名の内訳は、PF1－66.7%、PF2－33.3%であった。クラス分けが完全確定した「Confirm」が 66.7%、「Review」が 33.3%という結果であった。

＜財務状況と課題＞

代表団の大会派遣（渡航）に際して、サポーター含めて当初 40 名程度・一人当たり 50 万円程度の必要経費が生じると見込み、約 2000 万円の予算計画を立てた。それに加えて強化のための合宿等に掛かる費用など、計画的かつ継続的な予算確保が「代表の大会派遣」には必要となった。

強化事業としての日本代表合宿の運営については、概ね JSC（日本スポーツ振興センター）様のスポーツ振興事業助成金を活用させていただいたが、主に会場利用料・スタッフ派遣費を賄うことが限界であり、派遣選手およびアテンダントの参加について経費を充当することができなかった現状がある。

ワールドカップ派遣に関しては JSC 助成金（最大 300 万円）、クラウドファンディング（総額約 480 万）と意思ある企業様やご個人からのご寄付のおかげにて、選手団の自己負担は 1 人 20 万円以下に抑えることができた。ご支援いただいた方々ならびに、多くの皆様方の奔走なくしては実現できなかった負担額であり、改めて感謝の意をお伝えしたい。

私自身が「日本代表」は多くの方々に夢を与える特別な存在であることを再認識できたのは、多くの方の財務支援をいただけたことが理由として大きかったと感じている。

＜4 年後向けた準備とは？＞

選手・スタッフ・サポーター一人ひとりの努力と多くの方々の支援のおかげで、2017 ワールドカップ日本代表チームはアメリカの地での戦いを経て、全員安全に帰国することができたと感じている。

今後の「日本代表」も、この競技に関わる方々の「夢」を担う役割があり、今回以上に戦えるチームに育っていくことを心から願うところである。

私からは以下のような課題提言をさせていただくことで、総括とさせていただきたい。

●ロードマップ：個々のスキルをあげる取り組み→チームとして戦術的な確立をする準備期間など、計画的な実施が必要。

●メディカル・コンディショニング・デイリーケア・分析・バックサポート体制・チームマネージメントなど、専門的に代表強化に関われる人材の育成を行う。

●FIPFA との連携・関係性の親密さを作ること。（密接な連携の必要性）

●国内におけるグラスルーツ展開で、どのような基礎スキルを身につけるか？

現在トップスキルを持つ選手の強化と並行して、今後代表を担う可能性のある若手プレーヤーや指導者に対して、求める基礎スキルを「国際大会」を意識したものに変えていく必要がある。グラスルーツレベルから取り組める練習などの構築も必要。

●国内大会と世界大会のさまざまな差を埋めていく取り組み（ソフト・ハード共に）

●代表プロジェクトを組織横断的かつ継続性をもって進めていく部門の必要性。

●W杯に繋がるターニングポイントとしての APO カップ開催・参加

2017FIPFA World Cup 日本代表チーム派遣事業
助成・協賛社・寄付者・支援者・協力者一覧

■助成
平成 29 年度日本スポーツ振興基金助成事業

■ユニフォームサプライ
アディダスジャパン株式会社

■協賛
株式会社日陸
ぺんてる株式会社

■協力
一般社団法人日本障がい者サッカー連盟
株式会社 ジャミング
株式会社ジェイワールドトラベル
津田駒工業株式会社
ノジマステラ神奈川相模原

■支援者
アチーブメント株式会社
青木仁志様
家族温泉木の花様
出水明様
関元輝様
野田拓郎様
幅上勇二様
株式会社ソーグッド様
中野繋光様
佐野方哉様
山本朋臣様
杉谷千登世様
通山賢一様
山田貴大様
加藤則行様
林麦介様
杉立眞理子様
豊住吉弘様
花山絵美様
竹田 憲一様
堀田哲一郎様
本木俊也様
長谷川功様
矢野秀一様
宮川恭明様
吉沢誠様
読売センター小金井スタッフ
ご一同様
クラウドファンディング（サイト：Ready For）を通じてご支援頂きましたのべ 291 名の皆様

■寄付者
PwC Japan グループ様
神奈川県霊柩自動車協会様
穂永宣子様
SimonS（サイモンズ）様
岩田美穂子様
加藤慶子様
石川圭子様
中島優子様
筒井洋子様
その他匿名希望の皆様

当文書内の文章・画像等の内容の無断転載及び複製等の行為はご遠慮ください。
お問い合わせは下記までお願い致します。

■一般社団法人　日本電動車椅子サッカー協会
メールアドレス　：　contact@jewfa.jp

公式ホームページ
http://www.web-jpfa.jp/
公式 Facebook
https://www.facebook.com/JPFA.PowerchairFootball/

JPFA